
Cool Sky

剣一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

COOL SKY

【Zコード】

Z5775C

【作者名】

剣一

【あらすじ】

久遠燈也と冷河空は今まで一緒にいた。これからも一緒に思つてた。けれど病魔は突然空の体に現れた。日々弱っていく空、見守る事しかできない燈也。それでも必死に互いに支えあってすごしていく。久遠燈也と冷河空の2人が織り成す淡く、切ない物語。

【プロローグ】（前書き）

本当に淡く、切ない物語を書けるかは正直まだ分からぬし、読者の人達がそう思ってくれるかも分かりません
ただこの作品の全てを読み終えた時にもう一度読みたいと思つてくれる作品を書けるように頑張つていきたいと思います

【アロローグ】

いつもと変わらないある朝

「ん~」

俺を夢から無理やり呼び出した携帯の田観まし機能を止めて、伸びを一回して動きだした。

夏の終わりが近いがそれでも毎朝毎朝つだるような暑さである。起きた俺は学校の支度を急いでし始める。

少しすると、玄関のチャイムが鳴り、

「お~い~ 燈也、学校に行くぞ。早くしる~」と俺には聞き慣れた少女の声が聞こえた。

今呼ばれたとは俺の事だ。一応紹介すると俺の名前は「久遠 燈也^{クドウ トウヤ}」だ。

学校の鞄を持ち、俺は急いで家を飛び出した。

「空、おはよ、今日もありがとな。」

「私が呼んだら、30秒で来いといつも言つてゐるだらつ。」

「いやいや、無理に決まつてんじやん……」

俺が今話しているこの美人は「^{レイカワ}冷河^{ソラ}空」。

この空と俺は俗に言う幼なじみという関係だ。

こんな美人が幼なじみで幸せって言う奴がいるが、そいつは現実を知らないだけだ。

美人つて言つても、嘘を知らないのか、どんな事でもワソクシヨンも置かずにはつきりと言つ。その上、無表情で何を考えているのか分からぬ。それだけではなく……

「早く行こうぜっつ

バゴッ

空はめりやくめりや強い……

鈍い音が朝の静かな住宅街に響く。

「いてっ！一殴るなつつうのつー！」

「遅れた燈也がそう言う事が言える立場ではないだろ。」

大袈裟な表現かと思うかもしれないが、本当にこんなもんなんだ。だって、空手や剣道などの段位持ってるんだぜ？

師範にも大会に出たら必ず優勝するって言われてるにも関わらず大会に出ないのは本人曰わく

「面倒くさい」らしい……

まあ、それでも空はいつもと変わらず今日も俺の迎えに来てくれた。いた。

家が隣の空とは幼なじみだけあって、幼稚園からの腐れ円だ。

昔は毎朝毎朝俺の所に来て、行きたくないどだぞをこねて居る俺を母親と共に無理やり連れていく空のことが俺は大嫌いだった……（恐ろしくて逆らえなかつたしな……）

だけど今では”あまり”気にならない。むしろそれが俺の日常の一部となつて居た。それによつて俺はめつたに遅刻をしない。

「やっぱ、慣れかな～」

「どうした？」

「いや何でもない。」

「独り言か？ 気持ち悪いな。」

「うるせえ。つかもう少し登校遅くしない？」

「何を言つて居る。早起きは体に良いんだぞ。」

「いや… そつは言つても、まだ朝6時だぜ？」

「誰が毎日わざわざ早起きして、掛け句の果てに迎えに行つて、さらには学校で勉強を教えて居るのかな？」

「へいへい、やーせん。」

「何だ？ その態度は。」

「いーいー、じめんつて。」

「許さん。今日は数学とその腐つた性根をみつちり再教育してやる。」

「

表情を変えずに言っているが、長い付き合いの俺には分かる。空は
きっと楽しんでいる。

「ハハッ」

もちろん俺もだけどね。

「この状況で笑うとは良い度胸だな……」

前回、まじでやばいかもしれんね……

そんないつもと変わらない会話をしながら俺達は学校に行つた。

この日も向れない、俺達の1日が始まると想つていた。

【アロローグ】（後書き）

後書きのコーナーでーす

ありがとうございます

自分の作品が初めての方もそうでない方もそんなの抜きにこの作品をここまで読んで頂きありがとうございます。

この作品は自分が2ちゃんねるのあるスレで書ききれなかつた作品を自分なりにしっかりと終わらせたくて書きました。

ただそれにあたり、そのスレでは主人公の事を『男』や『女』などで括ってしまうのですが、散々悩みやはり名前をつける事にしました。

だからこの作品の名前のある登場人物には色々あります。w
これから後の書きではその設定などを書いていきながらも、後書きオリジナルのお話（？）みたいのを書きたいと思います。
この作品の半分は書けているので近いうちに少しずつ投稿していくたいと思います。

とりあえず、以降の作品も少しだけでいいので楽しみにして下さい。（他のたくさんの作品を読み終えた後に流し読み程度でもいいんで……w

まだまだ未熟者と思われる方もたくさんいると思いますが、未熟者なりに一生懸命書いていきたいと思います。

2007.8.28

剣一

【第一話～全ての始まり～】（前書き）

第一話投稿します

この話から2人の物語は動き出します
ぜひ、読んでといって下さい

【第一話～全ての始まり～】

熱がこもつてしまつてゐる体育館での朝会はかなり辛い。朝、空の特別超スパルタ授業を受けた、受けていない関係なしでだ。もちろん今日も空に勉強を教えてもらつていて俺は熱氣と睡魔に必死に耐えていた。

「…であるからして…」

今日も校長の話は長い。あまりにも暇になつた俺は退屈しきりに近くの空に話しかけた。

「今日もあのハゲは話が長いな～」

「あ、ああだが、あのハゲ校長もか、髪が無い事を気にしているのだからハゲ、ハゲ言つたらか、可哀想だぞ…ハアハア…」

（俺よりハゲつて言いまくりだよ…）

空は校長を俺よりきつと罵倒してはいるものの、額に脂汗をかなり浮かべ、明らかに顔色が悪かつた。

「空、どした？ 大丈夫か？ 何か顔色す”いぞ。」

「質問ばかりだな。ちょっとくらべてやるだけだ。あまり気にするな。」

「いやいやくらべてやばいんじゃないのか？ 保健室行つた方がいいんじゃないか？」

「あ、いや、だい…あ…」

俺の見ていくなかで空が倒れていく。空の特徴的な綺麗で長い黒髪が俺の目の前でなびいていた。

ドサッ

「おいつ空…？ 空あああ…？」

俺は全身の血の気が引いていくのがはつきりと分かつた。

俺は必死に動こうとしているのだが、俺の体は全く動こうとしない。いや、動けない。

空が倒れた音や俺の叫び声などによつて事態に気付いた生徒達が徐々に騒がしくなつていく。

そんな中、慌ててやつて来た教師達によつて空が運ばれて行くのを俺は何もできずにただぼーっと突つ立つて、見ていた。

そんな時俺の肩を誰かが叩いた。

「おい燈也、燈也？どうしたお前も具合悪いのか？」

それは悪友の内藤だつた。内藤の声によつて俺は急に現実に戻された。

「ほれ、早く冷河のとこ行つてきなよ。」

俺は内藤の予想外の言葉に驚いた。

「担任には俺が言つといてやる。早くお姫様んとこ行つてこいつて。俺が行かせなかつたなんて冷河に知られたら、俺がやばいからな。」

内藤はちょっとふざけた口調では言つてはいるが、顔は似合わないほど大真面目な顔だつた。

「あ、ありがとな…ちょっと保健室に行つてくる。あ、キザなセリフは似合わなあぞ。」と内藤に告げ、俺は急いで走り出した。

空が倒れたことにより朝礼は軽い混乱が起きていて、抜け出すことは難しいことではなかつた。

「大丈夫…大丈夫…」

俺はこう呟きながら保健室に向かつて必死に走つて行つた。

【第一話～全ての始まり～】（後書き）

第一話、読んでいただきありがとうございました

今回の後書きでは主役2人の本編には出てこない裏設定を書きます
まずは主役の久遠燈也！！

こいつはドクオつてキャラ（AA）がモデルです
クドウつて名前はドクオを並び替えるとできますw
次はヒロインの冷河空！！

このモデルは素直クールです。この素直クールとはクーと呼ばれる
事があるんですよ

空つて名前は本編ではソラと呼ばれます、この空つて漢字、読み
方を変えるとクウですよね。クーを縮めてクウ、そこから名前がき
ました

名字の冷河はクールは冷たいとかの意もあるのでそこからきました

まあ2人の裏設定はこんなもんですかね……

まあ正直分かる人にしか分からない内容なので……

これからも裏設定があるときは裏設定、ないときはつまらない俺の
話、そして5の倍数の話では……

5話まで待つて下さいね～

ではでは今日はこのくらいで…

次回もよろしくお願ひします

以下再編集部分

え～前回の最後にですね日付をいれて終わらせたんですよ…

完璧今回のは後書きでは忘れてましたwww

だから気付いた今日の日付を.....

2007.9.4

剣一

【第一話～第三話】（前書き）

第三話投稿します

読んでつてみて下さい

【第一話～長い一日～】

保健室には先生が一人いるだけだった。

「せ、先生、そ、空は？」

「冷河さんなら今ベッドで横になってるわよ。」

正直、俺がなぜここにいるのか何も聞かないでくれた事はとても助かつた。ただ俺から離れながら

「若いわね……」と呟いていたのが聞こえた。

俺は静かにベッドに近付き、閉められていたカーテンの隙間から頭をいた。

「君は女性が寝ているベッドに何も言わずに近付くのか？」

笑みを浮かべて俺を見つめている空が横になっていた。

「ん、『めん…』で、具合は？」

「フフ…君のそのような突拍子な行動にはもう慣れだ。昔も私が部屋にいた時…」

「ああ～その話はい～っ…！…ぐ・あ・いはぢつなんだ？」

空がいきなり昔の俺の事を語り始めようとしたので俺は無理矢理遮つた。

多分その話とは昔小学校の低学年くらいの頃の事だろう。昔、空の部屋の方からいきなりドゴンッ！ドゴンッ！と音がしたかと思つと、変な叫び声が聞こえ始めた。

幼心に空の身の危険を感じた俺はほとんびりついている自分が空の家の屋根を走り、空の部屋の窓を開けて、飛び込んだのだ。

飛び込んだ俺の目に入ってきたものは散らかった部屋の真ん中で、少し前に買ったという子猫を抱いて、服を乱れさせていた空がいた。

忘れてくとも忘れないその時の空の言葉…

「君は何をしてるのかな？」

空は昔からこんな話し方だつた。

俺は事情を言つ前にその場で俺は空によつてボコボコにされた。

その後聞いたところによると空は子猫が空の部屋で逃げ回るので捕まえようとしていたのだが、子猫がかなり走り回りつていたらしい。

そこを俺が丁度窓から入つて来て、その行動を俺が覗きに入つたと空が勘違いして俺を半殺しにしたのだ。

俺は当然両親からこびっどく絞られた。

空は少ししてから俺が覗きではなく、心配で来たという事を理解し、"半殺しにしたこと"については謝つてくれた。

恥ずかしき俺の昔話(1)で終了

「まあ…とりあえず私は貧血らしいから、病院に行く事になつた。今日は早退する。」

「そなうのか…分かつた。荷物でも持つてこようか?」「珍しく気が利くじゃないか。」

そこには幼なじみを心配に思う、何気ない会話があつた。俺達は今まで互いに何かがあると、なんだかんだ言いながらも助け合つて過ごしてきた。

この後俺は空に荷物を渡し、授業を空の心配をしながらも眞面目に受けて過ごしていた。空のためにノートもいつもより少しきれいに書いてみた。

(他のページ見られたらばれるよな……)

空が早退して数時間後、特に何も起きずに学校が終わり俺は家に付いた。

玄関に荷物を置き、空の家に行く。

空の家のチャイムを数回押しても、空の家からは誰も出てこなかつた。

（空、大丈夫かな？……）

結局、どうしようもなくなつた俺は空へのメールを送つておいた。

そのメールの返信が来たのは夜になつてからだつた。

「遅くなつてすまん。医師によると体調があまりよくない状態らしいから学校を数日欠席する事になつた。担任には母親から連絡しつくはづだが、私の友達から聞いてきたら心配なことでも言つておいでくれ。

明日私が迎えに行けないが遅刻はするなよ。もし遅刻していたのが分かつたらぶつ飛ばすからな。」

俺は空のメールを確認するとすぐに返信の文を打ち込み始めた。

「わ、分かつた。

遅刻はしないよ」”努力”はするよ。
無理するなよ。

お大事に、おやすみ……」

「よし、そーしんつ」

（つか、空のぶつ飛ばすは俺を地球の裏側までぶつ飛ばしそうだが……）

「ああ～ねみい～」

俺はぐだぐだ言いながらも、空のせい（おかげ）で日課となつていて予習、復習をしつかりとこなしてから眠りについた。

夢の中で俺はあの桜並木を歩いていた。

一步一步あの日や今までの俺の記憶を確かめるよつ。

【第一話～長い一日～】（後書き）

こんにちは一つ

第三話です

今回はどうでしたか？

最近、このサイトでの執筆ばかりの毎日で俺のサイト放置状態つすw
人間あれこれ手をだしちゃいけないもんですね（まだしつかりして
いない時は…

燈也の長かった1日はこの話で終わるかな？w
まあ…とつあえずまだまだこの2人の話は続くのでたまに読みに来て下さい
よろしくお願いします

【第二話～桜並木の君～】（前書き）

えー…前回前書きをやらいで第一話なのに第二話と書いてありました
すいませんでした

今回は本当の第三話
『桜並木の君』です

【第二話～桜並木の君～】

「燈也、早くしろ。」

「お、おう。」

まだ俺の体に馴染んでいない制服。俺は玄関先でまだ新しい革靴を俺の足に押し込み、家の前で待っている空の所に行つた。

「おはよう。」

「はあ……」

俺の顔を見た瞬間、空は一つ大きなため息をついた。

「人の顔見てため息つくなよ。」

「違う、君の顔じゃなくて、君の格好だ。」

「え？」

俺が自分の確認をしようとした時、空の白い手が伸びてきた。

「ネクタイが曲がっているんだ。」

「あ、ありがと。」

（空の顔が近い、良い香りだ…つかいつからこんなに綺麗に…）

俺の思考は空の拳によつて遮られた。

「燈也、早く行くぞ。あ、おば様おはよひじめいます。」

俺の後ろにまにまにか母親が立つていた。

「空ちゃん、おはよう。また綺麗になつて～もううちの馬鹿息子の

面倒なんかいいから、さつさと良い男見つけなさい～」

「私が面倒見てないと、燈也は何もしないと思うので。」

「それはそうだけどね～燈也はもういいわよ～じゅあ空ちゃん、燈也行つてらつしゃい。」

「おば様行つてきます。」

「行つて来まーす。」

高校の始業式が始まった。

人の多さには驚いたが、それに見慣れてしまつと、後はただ退屈な

だけで俺はあくびを押し殺していただけだった。

あくびをしないのは先程あくびをした時に偶然こいつを向いていた空にこらまれたからだ。

俺がうとうとしている間に始業式は終わった。俺はのろのろと立ち上がり、とりあえず一年間一緒に過ごすクラスメート達と教室に向かった。

結局、高校生活の一日目はあつという間に終わった。

俺が上履きを履き替え、外に出ようとした時に何かで頭を殴られた。

「いってえな！」

振り向いた俺の前には学生鞄を前に持つ空が立っていた。

「何分待つたと思っている。」

「文句は俺の担任に言つてくれ。」

「さあ、帰るぞ。」

校門までの校庭には部活動の先輩が帰宅しようとする新1年の生徒に片っ端から声をかけていた。

前を歩く空はかなりたくさんの部活から勧誘されていた。そのおかげで後ろを歩く俺があまり激しく勧誘されないのはラッキーだ。だがよくよく考えてみると、俺一人で帰る訳ではないので、結局早くは帰れないのだ。

「すいません、私どこの部にも入部の予定はないです。もちろんマネージャーもやりません、失礼します。あーもう…燈也ー」どんな事も戸惑いなくズバズバと言う空も先輩の多さとあまりにしつこさにいよいよ俺に助けを求めてきた。その瞬間「ぜひ我が部のマネージャーに…」と必死になっていた先輩（男）の目線が空から俺に変わった。

（あー…殺氣を感じる…俺…付き合つてゐる訳じやないんだけどな…）

中学の時からこんな勘違いは良くされていた。慣れていると言えど確かに慣れているが、やはり喜ばしい事ではない。

「そ、空早くしろ。」

完全にアウターとなってしまったこの場から逃げ出したかった俺は空の手を握り、どんどん進み始めた。

「ふーお前の人気も何とかしてくれよ。」

やつと学校の敷地内から出た俺達は徐々に散り始めた桜並木を歩いていた。

「そろは言つてもしようがないじゃないか。」

空は後ろ手で鞄を持って俺の数歩前を歩いていた。

空が一歩歩く度に空の特徴的な長い髪が揺れ、風が少し吹く度に咲き誇っている桜の花びらが舞っていた。

「燈也…」

横の桜を見上げていた俺は空の方へと視線をやつた。

「ん？」

「これからもよろしく。」

前を歩いていた空が振り返った。

桜の花びらが舞う中、空の綺麗な髪がなびいた。

「燈也、これからもよろしくな。」

「あ、ああ…」

（何だ…この変な感じ…）

「ほら、燈也帰るぞ。」

「お、おう。」

（まあ、いつか…）

俺は変な感覚を覚えたが、それは空の言葉で曖昧になってしまった。

【第二話～桜並木の君～】（後書き）

今回もありがとうござります

早いもので読者が100人突破しました

新しくされたユニーク表示と総表示に分かれて結構分かりやすいです

さあ今回の話では空と燈也の入学式のお話です

今回の物語はかなり急に入れたんです

当初の予定では昔話なんて全くなかったんですが、どつかの作者が

「回想いれたいなあ…」

「もつと互いが学生のシーンいれたいなあ…」

「空が元気な時みたいなあ…」

とやがり何やがりの思い付きで書きました

まだまだ2人の物語は始まつたばかりです

皆様温かい目で2人を…むしろ自分を見守つてくださると嬉しいです

でわ次話でまた会いましょう

【第四話～不安、約束、決意～】（前書き）

こんばんは

第四話の【不安、約束、決意】を投稿します

今回は後書きもぜひ田を通してみて下さ

でわ本編スタートです

【第四話～不安、約束、決意～】

それから数日後空は何事もなかつたかのように俺の迎えに来た。

「休んでいた間遅刻はしてないか？」

「いつもと変わらない朝

「第一声がそれかよ…俺だつて心配したんだぞ？」

「いつもと変わらない会話

「ほう…ありがとな。燈也が心配してくれるとは驚きだな。しかし私も燈也が遅刻をしていなかつたか心配だ。」

「いつもと変わらない風景

「大丈夫、約束通り遅刻はしてない。まだ死にたくないからな。…で、病気は大丈夫か？」

動き出す歯車

「それはどういう意味か聞き出す必要があるな。とりあえず病気の事だが…検査で何か引っかかつて来週から再検査のため入院をする事になった。まあ大丈夫だろう。」

止まらない時

「にゅ、入院つて大丈夫なのか？何かあつたらいつでも言つてくれ

よ。

響く言葉

「燈也は優しいな。」

氣付かぬ現実

「毎日でも見舞いに行つてやるよ。」

約束

「ふつ…嬉しいがちゃんと勉強はしてくれよ。私のせいで成績が落ちたら、責任を感じてしまづ。」

笑顔での約束

「成績は下げるかも分からんが、毎日は必ず行く。今決めた。」

固い約束

「ハア……決めたならもう燈也は私が何を言つても聞かないから好きにしる。」

そして空は再び入院した。

俺は言つた通り毎日病院に行つた。そして、面会時間終了ギリギリまでずっと側にいた。

空の病室にいる間、2人の間で話が叶わることはなかつた。

「ちゃんと勉強はしてるのか?」

少しやつれた顔の空が聞いてくる。空は日に日に痩せていついていた。

「ああ…ちゃんとやつてる。病人は人の心配してないで、自分の体

を心配しどけよ。」

俺はその言葉の通り今まで以上に勉強に取り組んでいた。

「そう言えば入院はいつまでかかるんだ?」

「私もまだ分からんんだ。お母さんに聞いてもまだ分からんらしいし。」

今、俺の目の前にいる空はいつもの何事もクールにこなしていく空ではなく、先の見えない入院生活に怯えているまだまだ少女である空だった。

「大丈夫だつて。これからも俺が側にいてやるよ。」

「フム…君は恥かしげもなく、よくそういう事を言えるな。だが今回はそれに甘えさせてもらおう。」

「今までだつて側にいたんだから、もつ当たり前の事みたいなもんだよ。」

「そこまで燈也が言つならしょうがない。仕方ない、私もこれから一緒にいてやるわ。正直、燈也のご家族から燈也の教育としつけを頼まれてるからな。」

「ありがと…つか俺はガキ扱いかよ…！」

「私の前では燈也はずつとガキだぞ。」

「つるせえ！」

「ほう…燈也は私にそんなに言えるまで成長したのか。」

空が冷え切つた目で俺を睨んできた。

俺の背中を寒気が駆け巡った。

「あ、いや…その…そんなつもりじゃ…」

空が俺のうぶれたえる姿をじつと見つめてきた。

（やばい…やばい…やばいよ！俺！）

「フッ…フフフ…フフ…」

俺の姿を見ていた空は急に吹き出した。呆気に取られた俺は何も言えずにただ呆然としていた

「フフ…やはり燈也はまだまだ私がいないとダメだな…フフフ…」

空は手で口元を隠して笑いを堪えながら、そう呟いた。

俺は時計をチララシと確認して、ゆっくりと立ち上がった。

「さて…そろそろ帰らなきやいけない時間だ。また明日来るな。」

「毎日来なくてもよい。むしろ来るなと何度も言つたら…」

「空、じゃあな。」

空の説教みたいな言葉を遮りながら俺は病室を出た。

帰るためにエレベーターに乗り込むと、やつには空のお母さんがいた。

「おばさん、こんにちは~」

「あら、燈也君じゃない。今日もありがとうね。今日は燈也君が来る前からちょっと主治医の先生とお話ししてたのよ。」

おばさんは微笑んでいたが、その微笑みはかなり無理をして作ってこいるように見えた。

乗ったエレベーター内で俺は独り言のゆっくりと呟いた。

「そ、その…空の病気は…」

俺が尋ねた時少しおばさんの表情が変わった気がした。

「まあ…大丈夫よ…それより燈也君が無理して病気にならないか私はそっちの方が心配よ。」

「お、俺は全然大丈夫ですよ。」

「フフ…頼もしいわね…」

こうゆう時の笑い方は空とともに似てると思う。

俺はそんな事を考えていたが、エレベーター内では徐々に気まずい雰囲気が充満していった。

1階についた事を機械の声が知らせると同時にエレベーターのドアが開いた。

「あつおばさん、俺、今日は自転車なんで…」

「分かったわ。ありがとね。本当に無理しないでね…」

「ありがとうござります、では失礼します。」

おばさんと分かれた俺は自転車置き場に向かい、まだ愛用しているMDのスイッチをつけ、自転車にまたがり、病院を後にした。

MDから俺の耳へと流れでる音楽がアップテンポな曲から一転、悲しいバラードに変わった。

俺は歌詞のように会えなくなる”2人”が頭に浮かんだ。

「…んな訳ねえよな…」

嫌な考えを振り払うように俺は更にスピードを上げて、見慣れた街並みを走り抜けていった。

【第四話～不安、約束、決意～】（後書き）

作者「今日は5回目の後書きとこいつ事で特別コーナーです。本編のイメージ崩壊の可能性もあるので、イメージ壊したくない方は読まない方がいいかと思います

え？ いつものつまらない後書きと回じ？ すいません、じゃあ自分は引っ込んで後は任したいと思します。じゃあビードー！」

（- A -）「「ビーも」」三。'。

（- A -）「え一本編で燈也をやらせてもうひとつ、ドクオです
川。」「今日はここまで読んで頂き誠にありがとうございました」といってます。私は空をやらせてもうひとつ、」

川。」「早くドクオ言え...」（小顛）

（- A -）「えっ！？俺！？えと... 今日はプロローグも含め、「」、5回目の投稿つて事で...えと...せ、本編にでてるキャラでオ話シシタイト思イマス。」

川。」「後半棒読みになつてしまつた馬鹿はほつておいてこれからは定期的にこの座談会をしていきます。

本編ではまだ私達2人がメインなので、徐々に色々なキャラに私達と一緒にでてもらおうと思つています。」

川。」「今日は残りが少なくなつてしまつた辺りで終了」という結果になつてしましました。後書きの文字数を全く頭にいれてなかつた作者のせいです。

もし次の座談会で何か話してほしい話題などがありましたら、お手数ですが作者にメッセージでも送つて下せ。あとまあず終わつてしまいすいません。

ぜひ次話もお楽しみ下せ。」

【第五話～傳わぬ姿～】（前編）

第五話の『傳わぬ姿』を投稿します

2人の物語は更に走り出します

ぜひ読んでみて下さい

【第五話～傳わる想の姿～】

「ンンンンン

それから数日後、俺の手は空の病室のドアを叩いていた。

「空、俺だ。今日も来たぞ。は…」

「入るな。」

入るぞと続けようとした俺の言葉は空の一言によつて遮られた。

「えつ…！」

「お見舞いに来てくれたのに悪いが今日は帰つてくれないか？」

その声は静かに俺が病室に入る事を拒否していた。

「わ、分かった…」

俺は病室に入る事を諦めた。しかし、結局俺はどうじよつもなく、空の病室に一番近いソファーに腰を下ろして、1人困ついていた。

「どうしたんだろ…いつもの空らしくないな…」

俺はだからといって何もできる事がなく、静かに面会の終了時間が来るのを座つて待つていた。

うとうとする訳でもなく、ただぼーっとしていても時間はしつかりと過ぎていくもので、気付くと面会の終了の時間だった。

「帰るかな…」

俺が立ち上がるとしたその時、俺の前で立ち止まつた人がいた。俺が顔を上げるとそこには空のお母さんが立つていた。

「燈也君…わざわざ来てもうつたのにごめんね…」

「あ、こんにわざ。いや、おまさんは気にしないで下さい。俺が勝手に来てるだけですから。」

「いや、でも悪いわよ…」

「いや、良いんです…それより…その…空の病気は…」

（俺はしつこいな…）

自覚はしているのだが、どうじても気になつてるので俺はおぼつかない

んに尋ねてしまつた。その瞬間おばさんの表情に陰りがさした気がした。

「その事なんだけど……」

「あまり…良くないんですか？」

「えと…やつぱつこれは空が自分で言つべき事だと思つのよ。」

おばさんはそう答えてくれた。そしてその言葉は暗に俺に對して空はあまり良い状態ではないと俺に教えていた。

その時はまだ”あまり”良くはないだけだと思つていた……

それから数日後に空の病室が変わつた。

おばさんに教えてもらつた俺はそれでも変わらずに毎日空の所へ通つた。

ドアをノックする度に病室の中から帰つてくれる返事は
「入つてくれるな。」の一言だった。しかし言葉はいつの間にか強くなり

「もう来るな」とこつ一言に変わつていた。

それでも俺は毎日毎日通い続けた。よく考えると空を疲れさせてい
るかもしれないが、止める事はできなかつた。

そんな事を続けていたある日。

「いい加減俺もしつこいな……」

俺は自嘲氣味に笑い、ドアをノックしようとした。

「あ…燈也君?」
その声の持ち主は空のお母さんだつた。

「あつ、おばさん、こんばんは。」「
ちょっと入つてくれる?」「

「えつ!?」

おばさんは俺の手を掴むと、俺を強引に空の病室に入れた。
当たり前の事だがその部屋のベッドの上に空が座つていて、ただぼ

一つと窓の外を眺めていた。しかし、おばさんに引っ張られ入った俺を見ると一瞬驚いた表情になつたが、すぐにいつものよつたな顔に戻り、俺を見つめていた。

数週間ぶりに見た空は前会つていた時の空よりむしろに酷い様子になつていた。

空の自慢の長い綺麗な黒髪はボサボサになつていた。前会つてた時も健康的だつたとは言えないが、でも今はそれ以上に体はガリガリになり、顔はとてもじやないが血行の良い顔付きだとは言えない状態だつた。

「そ、空……」

「燈也……見られてしまつたか……」

俺を見つめていた空は笑顔を作り出した。その笑顔はあまりにもぎこちなく、まるで笑顔の作り方を忘れたが、それでも無理して笑おうとしているようだつた。

「お母さん、燈也をもう入れるなと言つたじやないか。」

「空、ごめんね……けど、あなたは燈也君にちゃんと言わなきやいけない事があるんじやないの？あなたにとつて燈也君はその程度の存在だつたの？」

おばさんは一気にそう告げると

「……」めんね……私ちょっと外行つて来るわ……」そう言つて病室を出て行つた。その時おばさんの目が一瞬見えたのだが、その目は潤んでいるように見えた。

「そ、空久しぶり……」

俺はそう言つて、初めて自分の喉がカラカラになつてゐる事に気が付いた。

「久しぶりだな……」

空は絞り出したかのような声で話しかけてきた。

「私も逃げてばかりいられなよつだな……なあ……」

空は自分に言い聞かすように呟いた。

「燈也、少し屋上に行かないか？」

「外に出てもいいのか？」

俺の言葉を空は昔のように鼻で笑つて答えた。

「フツ……燈也、私もそこまで重病人ではない。ほら行くぞ。」

そう言つと空はベッドから立ち上がり、ドアへすたすたと歩いて行つた。

結局一人で部屋に残る訳にもいかない俺は弱々しくなつてしまつた空の後ろ姿を見つめながら無言で空について行つた。

どうしたんだ？

もう大丈夫なのか？

なあ……空……

俺は空に對して話したい事がたくさんあるのに話しかけられずにいた。

エレベーターホールでボタンを押す空の指はとてもやせ細つていて、簡単に壊れてしまいそうだった。

エレベーター内では薬の匂いのせいで俺はさらに空がとても弱く、そしてとても儚い存在のように感じてた。

【第五話～傳わる物語～】（後書き）

今回も読んで頂きありがとうございます

前書きにも書いた通り2人の物語は今まで以上に動きました
この辺りの内容は前半の山場と言つてもいいくらいだと自分では思
っています

その山場を自分なりに上手く書けたらいいと思つています
次話もぜひ読んで下さい

前回の後書きと今回の後書きの温度差激しいな WWWWW

【第六話～青空の君～】（前書き）

第六話の『青空の君』を投稿します

今回の話は『C O O L S k y』の重要な部分の一つです

多分、全編を通じ、素直クールの空がここまで色々な表情をする話
はもうそうそうないかもしません

その部分を頭の片隅に起いといて下さい

2人の大切な気持ちと言葉をぜひ読んで書いて下さい

【第六話／青空の君へ】

エレベーターが最上階に着き、俺達2人はそのまま屋上に出た。そこには綺麗な青空が広がり、思いつきり光り輝く太陽が干してあるタオルを余計に白く、眩しくしていた。

空はゆっくりとしかしつかりとした足取りで手すりの所まで行き、青空を見上げた。

俺はと言うと、痛々しい空の後ろ姿を直視する事が出来ずに背を向け、そして俺も無言で空を見上げた。

空はどこまでも青く広がっていた。

何分たつただろうか…それでも俺達2人はずっと空を見上げていた。

空が言葉を選ぶようにゆっくりと話し始めた。

「燈也、今までの事を怒っているか？」

「別に…」

「許してくれるのか？」

「許すも何も、空は悪い事を何もしていないだろ？」

「燈也…」

「なんだ？」

「燈也は私の事が好きか？」

「お前らしくもないな…何だよそれは…」

「友人として好きか？それとも…女として…好きか？」

「え？」

空の言葉の意味を理解できなかつた俺は空を見上げるのをやめ、振り返つた。俺の目線の先で空はまだ空を見上げていた。

「フフ…もう一度聞いてみよう。燈也は私を好きか？それとも幼なじみという枠からは抜け出せてないか？」

俺は空の言葉の意味を考え始めた。

俺にとつて空とは？

腐れ縁？幼なじみ？親友？

分からぬ…

本当に分からぬのか？

嘘だ…

分かつてゐる

離れたくない…

離したくない…

傍にいたい…

守りたい…

俺は今まで生きてきて、空への気持ちに今更ながらやつと詰づいた。

空の言葉は俺にやつと自分の奥にあつた正直な気持ちを分からせた。

俺は冷河空の事が好きなんだ

きつと今まで自分自身を抑えつけていたのだろう。けれど俺の心の中の鍵は今、空の言葉によつてやつとなくなつた。

「フツ…」

空はまだ青空を見上げながら軽く笑つた。

俺はそつと近づき、今にも崩れていきそうな程弱々しくなつてしまつた空を後ろから抱きしめた。

「俺は今まで自分の気持ちに気付いてなかつた。今やつと気付いたよ……俺は空の事が好きだ。」

抱きしめている時、空からは淡い香りシャンプーのような匂いがした。

（やべえ……ぶつ飛ばされないかな……）

いきなり抱きしめた上に、告白までしたのだ。もしかしたら俺は半殺しにされるのではないだろうかと内心少しだけ怯えてしまつていた。いや、半殺しではすまないかも知れないけれど……しかし、それでも力を入れたら崩れ落ち、目の前から消えてしまいそうな空の体をむざむざと放す事は出来なかつた。

今俺が抱きしめている間は空の温もりを俺の手でしつかりと感じる事が出来たからだ。

俺が空の温もりを感じている間、空は確かに俺の腕の中にいて、どこにも行く事ができなかつた。

「燈也も同じだつたのか……私も入院して、私の我が儘で会わなくなつて、意地を張つてた。君が来る度に何回も君に会いたくて、声が聞きたかつた。それでも自分自身の気持ちが分からなかつたし、我慢してた。けれどお母さんが燈也を連れてきて、燈也の顔を見た時私自身の気持ちに気付いた。今までの押し込めていた私の気持ちがやつと見つかった。私も燈也の事が好きだ……」

空はそう告げると、手を俺の手に重ねた。

「フフ……燈也の体は温かいな……私は幸せだ……最高に幸せだ……けどな、私はする……」

空は自嘲氣味に静かに笑い、そしてこう続けた。

「燈也……私は、私は後半年程の命らしい……」

空はそつと俺の腕をほどき、1歩離れ、こっちを振り返つた。

「それでも……それでも私を好きでいてくれるか?」

俺の顔を見つめている空は泣いていた。

空の本当の感情は空の瞳から溢れ出し、頬を濡らしていた。

半年…

確かに何かしらの覚悟はしていた。空の状態や空のお母さんの言動で薄々感じてはいた。ただ、気づこうとしていなかつた。しかし、現実はそう甘くはなかつた。

たつた…たつた半年だけ…

「は…はあ？…」

「私は真面目に言つてるからな。」

「早すぎるだろ…やつと、やつと気持ち分かつたのに…」

俺がそう呟いても、空は俺の事を濡れた瞳で見つめながら、微笑んでいるだけだつた。

それでも俺の気持ちは変わる訳がない。

「空…それでも俺は君の事が好きだ。」

「ど、どういう事だ？」

俺の答えが女空思つていた答えではなかつたのか、空は珍しく動搖していだ。

「わ、私は後半年程なんだぞ？私なんかより…」

空がまだ何か続けようとしたので、俺はその言葉の続きをそつと遮つた。

「空より大切な人は俺にはいない。ちゃんと言つ。俺は冷河空の事が好きです。俺と付き合つて下さい。」

「ハア…全く…私はこんな男のどこがいいのだろうか…だけど…よろしくお願ひする。私はやはり少しでも君と付き合つてみたい。」

そう言つた空の顔は泣いていた上に、いつものように無表情だった。しかし、きっと空は心では笑つていただろう。

「…」こんな事ならもつと…もっと生きたい…燈也の側にいたい…

「ならずつとずつと俺の側にいる。俺から離れるな。俺が側にいる。

だから一緒にいよう。約束しよう。な?」

空は無言で俺に近付き、俺の胸に顔を押しつけてきた。俺は恐る恐るだが手を回した。

「ばか…」

「バカで結構。これから一緒にな。」

空は俺の言葉に一度だけ頷いた。

「ああ…」

空は泣いていたようだが俺は静かに抱きしめていただけだった。。

「燈也…本当にありがと…」

どのくらいたつたのだろうか。空は俺の胸から顔を離した。

「気にはしない。、空、そろそろ病室戻んど。具合悪くされたら困るからな。」

「だから私をあまり重病人扱いするなと言つてているだろ?」

「いや…だから…そのか、彼女がこれ以上具合悪くなつたらいい、困るだろ?」

俺が照れながら言つと、空は少しばにかんでいたが、すぐにいつものように素つ氣なく罵倒してきた。

「燈也…真顔でその言葉は気持ち悪いが…」

「うつうるせえ」

「ほら、私の大事な恋人よ行くぞ。」

そう言つて空は俺の手を握り、歩きだした。

「…」、恋人つて…あつ引つ張んなつ」

急な空の言葉に戸惑う俺をよそに空は細い腕でぐいぐいと引つ張つて歩いていった。

青空は空のように優しく、澄みきって、広がっていた。

この日俺達の今までとは全く違つ、新しい2人の生活が始まった。

半年という期限の中で……

【第六話～青空の部～】（後書き）

今回も読んで頂きありがとうございました

前書きでも書きましたが、この2人の物語の一つの重要な点です今まで『幼なじみ』という大きなものに隠れていた『気持ち』がこの話でやっと光を浴びます

この回で『空』という単語が多様されていますが、自分が青空も曇り空も含め、『空』が好きだからです
もちろんそれだけではありません

でもこのでは言いません
「考えてないだけだな」と思になる方もいるかもしませんが、本当に違います

自分の考えでは、小説の作者の意図を「いつ思つてたのかな?」と考えるのも小説の楽しみだと思つんですよ

それが作者の意図していた事と違つたとしても
作者の意図をこの一つと限定して考えるのは学校の授業だけで十分です

だから自分は自分なりの『空』の意図があり、読者の方々には読者の方々が考えた『空』があるんですね
もしかしたらこの後も度々『空』が多様されるかもしませんが、
その時は「また作者の空好きか...」と「この空が表す意味は?」と
考えてみて下さい

お読み頂きありがとうございました
次話もよろしくお願いします

自分で「ここまで書いたか…」と編集中にぱぱっと痰ぐらじやつたのは内緒ですw

【第七話～空を駆ける橋～】（前編）

第七話を投稿します

今日はいつもと変わったお話です
お楽しみ下さい

【第七話～空を繋ぐ橋～】

「ふう……」

唇から溜め息とはまた違った空気が漏れた。
ベッドの上から窓の外を眺める。そこには見慣れた、しかし一瞬毎に変わる物が私を見下ろしていた。

アレは昨日も同じように蒼く澄んでいた。

私の頭は瞬時に昨日の事を鮮明に思い出した。今でも思う。何で私はあんな事を言ってしまったのだろう。

昨日はあいつの顔を見た瞬間に私の心の壁は脆くも崩れ落ちていった。

先日、担当医から告げられた一言は私を真っ暗闇に突き落とした。
しかし私はその言葉を受け止めた。そして覚悟を決めたつもりだった。

覚悟を決めた

だから私はもう一度とあいつやその他の友人達に会うのはやめようと決めた。

もうあいつに会う事はきっとないと思っていた。だから日々私に与えてくれるあいつの優しさを跳ね返していた。

しかしあいつはそんな事全く気にしなかつた。何を言おうと変わらずに毎日来てくれた。

私は動搖していた。しかしそれ以上にあいつの毎日来てくれるという行為が徐々に嬉しくなっていた。しかし私は自分自身を隠したまままだった。

そんな時だった。

見かねたお母さんがあいつを私の部屋に入れた。

あいつの顔を見た時、私は言わないと決めていた。しかしその決意は簡単に崩れた。

そして、私自身の気持ちが分かつた。

しかし怖かった…

もし気持ちを告げて、拒否をされたら…

それでも全てを言わなければいけないと感じた。

私は屋上に行くことにした。多分、看護士の人達にばれたら色々言われるだろう。

それでも、窓の内側からではなく私の目で空を見上げたかった。

私は昔から空を見上げていると、落ち着いた。こんな性格や言葉遣いだから何度もいじめられた事もあった。しかし遠く広がる空はそんな事を気にも止めずに私を見下ろし続けていた。

そして空と同じようにあいつも私の性格や言葉遣いを全く気にしなかつた。私よりも弱いくせに何度も自分を犠牲にして私を守つてくれた。

だから多分昨日は私が行く事ができる屋上という最も空に近い場所でなかつたら、大切なあいつに対しても全てを正直に告げられなかつたと思う。

きっと空が、あいつが私を見てくれると思ったからこそ、言葉が出てのだろう。

そして屋上で全てを話した。

私の気持ちを…私の未来を…

きつとあいつは受け止めないと思つていた。

しかし…

しかしあいつはさも当然のように私を、私の気持ちを受けとめてくれた。

その時私の中で何かが弾けた。

未来に対して諦めていた気持ちはなくなつた。

もっともつと生きたくなつた。あいつの傍にずっといたくなつた。

なぜ私の未来はすぐそこで閉じてしまつたのだろう。なぜあいつの傍にもつとこさせてくれないのだろう。

私は自分自身が恨めしい。

ここまで自分の事を恨んだ事なんてなかつた。
でも今は、今は…

あいつの前ではもう少しだけ、もう少しだけ…意地を張つてみよう
かな…後少しだけ頑張つてみようかな…

私はいつだって強かつたんだ。

今まで強く生きてきたんだ。最後まで貫くのもいいじゃないか。む
しろ最後まで貫いてやるひじやないか。

昨日は私の弱い部分あいつにかなり見せてしまつたしな…
あんまり弱い部分見せすぎるとあいつが調子に乗るしな…
まあ、でもたまには頼りにするのも悪くないな…
あいつになら…

私は考えをやめ、再び空を眺めた。

肝心な事言つ忘れてたな…

燈也ありがとつ

【第七話～空を繋ぐ橋～】（後書き）

今回のお話はどうだったでしょうか？

空田線から見た第六話の話です

ん～正直むずかつた…

それでも結構勢いで書く事ができました

当初の予定ではこの話は書く予定もありませんでしたし…

何か今日は後書きのネタないなあ…

次か次くらいに新キャラ登場なんでお楽しみにっ！～W

【第八話～思い、想い～】（前書き）

八話を投稿します

今回は新キャラが出てきます

ただ、本格的な活躍はまだ少し先になってしまします

【第八話「思い、想い」】

俺は今日もいつものように空の病室にいた。

最近分かつた事が2つあるのだが、まず1つ目に空のお母さんは俺達を2人きりにしようとしてくれるのか空の病室にはだいたいは午前に行き、午後はできる限り俺だけにしていてくれている。

そして、2つ目は空は友人達に病気の事まだを話していない事だ。無表情でいつもクール、何事もはつきり言う空にも親友と呼べる存在はいる。もちろん俺もそいつらとは仲良くしている。

それなのにそいつらにでさえ、空は報告するのを拒否していた。もちろん俺がそいつらに言つことも禁止されていた。

俺はその事がずっと気になっていたのだ。

「なあ……空……何であいつらに言つちゃ 駄目なんだ？」

空は1つ大きなため息を付くと、俺と目は合わせずに窓の外を眺めながら話し出した。

「正直言うとな……燈也にもこの私の姿は見ていてほしくない。ただの私のわがままだが、私の友人達にも、もちろん燈也にもこんな姿を見せたくないのだ。」

俺は何も言つ事ができなかつた。

「ただの自己満足で、みんなにも心配させて迷惑をかけているのを分かつているのだがな……」

空が額の髪を少し払つた。

「強い私でいたいんだよ……」

空がそう呟いた横顔はどこかものせびしげだった。

「なあ……空……」

俺はさらに続けた。

「そんなに強くなくたつていいんじゃないのか？空は空だろ？無理してみんなが持つイメージの空でこようとしたくてもいいだろ……」

空は俯いて俺の話を聞いていた。

「空が別に弱くたって、強くたって空は空だ。俺が、あいつらが知つてゐる空だよ…冷河空を演じないでいいんだよ?」

俺はそこで言葉を止めた。結局、俺が何を言つても最終的に決めるのは空なのだ。

俺の目線の先で真つ白な空の細い指先が少し震えていた。

「悪いが、そろそろ時間だ…何かあつたら電話でもしてくれ。」

「ありがとう…」

俺を見つめた空の目が光つて見えたのは俺の見間違いかもしれない。

その夜、空から電話があつた。

「もしもし」

「私だ…」

空の声はとても暗いものだつた。

「空、どうしたつ? 何かあつたのか! ?」

俺の慌てた声に驚いたのか空は少し戸惑つたがすぐに話し出した。

「すまん、今日燈也が言つてた事を私なり考えたんだ。それでやはり私の親友であるあいつらにはしつかり本当の私を見ておいてほしいと思つたんだ。だからあいつらだけに来てもらうように言つてくれるか?」

「分かつたよ…空が決めたなら俺はそれを手伝つてやるよ。」

「フツ…馬鹿たれ…」

「馬鹿で結構。津出、灯糸、深澄でいいんだよな? つか内藤はどうする?」

「そいつらだ。内藤はどちらでも良いぞ。」

「内藤が可哀想じやねーか。」

「あいつは打たれ強いから大丈夫だ。」

「ブツ、それ理由になつてないつて」

「フフ…そだつたか?」

空はやつと調子を戻してきたみたいだつた。

「空…」

「ん? なんだ?」

「さつきの空の言葉だけどな、『見ておいてもいい』じゃない』これからも見続けてもらひ『んだからな?』

「フム… そうだな… 君とはこれからもずっと一緒にいて、見続けてもらわなければな… 夜遅くにすまなかつた。」

「気にすんなつて。じゃあ、おやすみ」

「燈也、愛していろ。おやすみ。」

「そつ、空つ!」

ツーツーツー

俺の声に答えてくれたのは空の声ではなく、無機質な携帯の電子音だつた。

いきなり愛しているとか言われた俺の頭は熱が出たように火照り始めた。

未だに空の突拍子な行動には慣れないと、

正直、これから一生慣れない気がするのは俺だけだろうか。

その後俺は携帯を開き、津出と灯糸そして深澄にメールを送つた。内藤は送らないでもどうせ暇人だし、津出がほぼ強制的に連れて行くから当口話せば大丈夫だろひつ。

遅くなつたが^{ツテ}空の親友達の説明をしておひつと思ひつ。

「津出 涼華^{リョウカ}」

空と一番言つてもいいくらゐの仲良しで内藤の彼女。顔は正直とても美人だが、口がめぢやくぢや悪い。しかし、一応根は良い奴だ。

津出は空と同じくらゐ戦闘能力が高い。

「灯糸 美咲」
ヒイト
ミサキ

熱血バカだからかなり暑苦しい。だからこそか一番友達に気をかける。（だがやっぱり気のかけ方も暑苦しい。）

運動神経は抜群だから帰宅部なのに何かと助つ人として呼ばれる。

「深澄 詩依」
ミズキ
シイ

本当に高校生かと思うほど幼い姿で子供っぽい格好をすれば案外小學生でも通るかもしね。姿と同じように思考や行動もかなり子供っぽい。

しかし、いつの間にか人の弱みなどを握っていたりする辺り単なる

幼児ではない奴だ。
ナイトウ
ヨウイチ

「内藤 陽一」
ナイトウ
ヨウイチ

さつきも言ったが、津出の彼氏。どのようにして津出を落としたのかは知らないが、多分こいつが持つ優しさだと思う。もっぱらいじられキャラで俺達から結構厳しくいじられる。俺にも男友達は普通にいるが、それでも内藤とは一番気が合つ。

空の親友達（他のクラスメートも）は空が入院してから俺にすぐに空の病状など色々な事を聞いてきた。

俺は俺も詳しく知らされていない事を答えといった。そして、その後に津出や灯糸、深澄、内藤にこつそりと空が今の自分自身の状況を知られたくないと言つてゐる事を告げた。そしたら空の性格が分かつてゐるのかそいつらもそれ以上俺に聞いてくる事はなかつた。

俺が津出と深澄からすぐに返信が着た。俺は明日空のお見舞いに行けるかどうか聞いた。

もちろん2人共一緒にいくとの事だつた。2人の返信から数分後に灯糸からも返信が着た。同じ事を灯糸に確認すると灯糸ももちろん行くとの事だつた。

俺は勉強を済ますとわざとビデオに横になった。

『燈也…』

俺の夢の中で空が微笑んみながら立っていた。

「空…！」

俺が伸ばした手の先に空はいなかつた。

【第八話～思い、想い～】（後書き）

まず自分の中では1-1月に投稿したかったのですが1-2月になつてしまい、「めんなさい

今回も読んでいただきありがとうございます

今回の話は空、燈也の親友の友人達の名前が出でてきます
次話からしつかり出てくるので楽しみに待っていて下さい

【第九話～肩に置かれた手～】（前書き）

遅くなりましたが第九話投稿です
そして10回目の投稿なのである「コーナー」が…

本編も後書きも楽しんで下さい

【第九話～肩に置かれた手～】

「じゃあ行くぞ。」

俺は津出、灯糸、深澄とやつぱり暇だった内藤と一緒に空のお見舞いに行く事になった。

「俺はチャリだけどお前らどうすんの？」

「私も自転車だあああ！」

「じゃあ私、ひーちゃんの「ひーしろつーもかうんじょーかはないとーの後ろよねつ？」

深澄は小さい体をピヨンピヨン跳ねながら、高めの声で騒いでいた。

「な、内藤しか空いてないから乗るんだからねー。」

「照れちゃつてかあわいー」

「詩依！からかうんじょーないのつー。」

「あははー」

俺は漫才のような会話を聞き流しながら自転車を駐輪場から引っ張り出した。

「ほれ、準備できたか？」

俺が自転車に跨って声をかけると、内藤の自転車の後ろに乗つて顔を真っ赤にしながらも内藤をしつかり握る津出と灯糸のマウンテンバイクの後ろに乗……

……れない深澄がいた。

「ひーちゃんつどうやつてその後ひ乗るのよー。」

「その出つ張りに足をかけるんだあああーーー。」

「いーやだ。むーり。足疲れーる。」

（……ガキかよ……）

深澄の文句でなかなか出発できないと、深澄がいきなり

「じゃあぐどーの後ろ乗るー」と言つて俺の自転車の後ろにちよこ
んと座つてきた。

「一ノ二三」

「おうううう！」

卷之三

深鑿の山岡で、子孫の藤が住んでいた。

場所をしつかり分かつて いるのは俺だけなので、俺も急いで自転車をこじき始めた。

少し余裕ができたので、俺に掴まつている深澄に聞いた。

「ひーちゃんの自転車は乗れないしーないとーはりよーかの物だし

「龜井の図」二二八

「いいじゃーん。サービスしてあげるからーーー

深澄はそう言うといきなり俺を強く抱きしめて、あまりない胸を押

し付けできた

触が
…

ねえ、今がチャンときたんだに」と

卷之三

「あははーぐどーの顔真っ赤つかーそらちゃんに言つちやおー」

「ノンダアハ助糸ノテ下サイ
一瞬で俺の脳裏に空の怒つている冷たい笑みが浮かんだ。

「あははー片言だあー」

「お前いい加減にしないと落とすぞ？」

「モモーベルがいじるやー！ ねむりんに寝かせよー」

俺緊急脳内しゅみれーしょん

「ほう、燈也は私の親友の詩依に卑猥な行為をしたのか」

「してませんっ！」

「詩依は胸を揉まれ、さうに用済みになると自転車から落とされそうになつたと言つてゐるが？」

「断じてしてませんっ！」

「告白しどきながら浮氣か。覚悟はできるな？」

「つなる可能性大だ……って言つたか深澄の性格からしてこれ以上の事を空に吹き込む可能性がある……

……」いつはかなりやばいぜ

あれ？……俺死ぬんじゃね？……

俺緊急脳内しゅみれーしょん終】

「深澄……それは[冗談にならんて……」

「言わないつてーそらちゃん怖いもんねーそれより場所分かつてないひーちゃんがどんどん先行つてるけどいいの？」

「あ、っ」

深澄に言われて気付いたが、場所が分からないのに前を走る灯糸はどんどん先に進んでいた。

斜め後ろを走る内藤はしつかり付いてきていた。

内藤の影になつて津出の様子は見えないが、多分顔を真つ赤に染めているだろう。

「おーっ、陽ー！ちょっと灯糸捕まえるから先行くからなっ！」

内藤の返事を聞かず俺は前方で何やら叫びながら爆走する灯糸に追いかくために、さらに必死にペダルをこぎ始めた。

俺の真後ろに座っている奴は呑気なもんで

「わあーはやあーい」や

「すうーい、すうーい」などの声がずっと聞こえていた。

ふと、俺はこんな風に空を自転車の後ろに乗せ走りたいと思つた。

多分空の事だから深澄みたいにこんなに喋りはしないだろう。

それでもきっと居心地は最高だろう。

上り坂も苦にならないに違ひない。

俺は空が治つたら2人でどつか空の行きたい所に連れてつてやるつと思つた。

「灯糸待てや～！！」

「あははー早い、はやあーーー」

【第九話～肩に置かれた手～】（後書き）

（- A、）「「ビーも」」川。・。）

（- A、）「今回もお読みいただき」

川。・。）「ありがとうございます

今日は本編にやつと登場した私の友人達が参加です

ツン「津出ことツンです」

ブーン「内藤」とブーンですね

ヒート「灯糸」とヒートだあ

しげ「深澄ことしげです」

作者「質問は今のところ特にないので勝手に話していく所をこ

（- A、）「はー」

川。・。）「この馬鹿作者」

ツン「じゃあ何しましょ」

ブーン「話を振らないでくれあ…」

ヒート「出れただけでもおkだあ

しげ「だよねー」

川。・。）「極秘情報によるところから出番が徐々に減っていく

みたいだぞ」

友人一同「なんだつてーーー？」

ツン「作者」

ブーン「ちょっと」

ブーン「ここここここ

しげ「来てね」

川。・。）「わあ何だかんだ言つて馬鹿騒ぎしてこたりやうやう

時間だ」

ツン「あら、もうへー」

ブーン「もつと出たかったお

ヒート「いやだあ

じい「ここで私から一言

私とヒートは彼氏募集中ですから立候補する方はこちらまで

(一A)「じゃなくてこんな座談会をしてほしいなどの要望はお手数ですがメッセージを下さい

作者が泣いて喜びます

後本当だつたら友人皆の絵文字もあるのですが、使用できないみたいので「了承下さい」

一同「お読みいただきありがとうございます

では次話までバイバイ

【第十話～温かい一晩～】（前編）

遅くなつてしまつ申し訳ありません

良ければお読み下さい

【第十話】温かい一時

二二二

「あ～俺。
ドアをノックする音が俺
”達”
が来た事を空に知らせる。

「盤古」の「アーティスト」

俺がドアを開けると『

「アーティストがアーティストをアーティストにする」

空はみんなの顔を見ると、すぐに笑顔になつた。

（それでもあまり表情が変化したわけには見えないか…）

「あの、俺もいるんだけど、

俺の隣から急に内藤の声が聞こえた。

「ちつと」四編

事がある。そこら辺の椅子に座つてくれ。」

「それなりって……」

内藤は何かしらふつぶつ言いながら、手近にあつたバイナ椅子に腰を下ろした。俺も座あうとして一歩空が俺を呼び寄せた。

「燈也は二つちに来てくれ。」

ん？ ああ

「あのな

空がみんなを見回し、一つ笑顔を浮かべた。

私は燈也と付考會の事になつた

俺が続けようとした言葉を急に遮ったのは空の柔らかい唇だった。

「えつ！？」

「ええええ！？」

「え～？」

「俺ダケイツモ対応ヒドイヨナ…ブツブツ…」

俺は一瞬何が起こったのか理解できなかつたが、すぐに脣から空の温もりが伝わってくるのが実感できた。そしてその温もりはどんどん俺の全身へと広がつていつた。

離れようとしても、空がしつかり俺に手を回しているので動けない。どこを見ればいいか分からぬ俺の目は空の綺麗なまつげをとりあえず見つめていた。

多分數秒後に空が離してくれた、しかし俺の中での時間はとてつもなく長かつた。

「そ、そ、そ、空何やつてんだよ！？」

「キスだが？ 嫌だつたか？」

「そ、そ～じやなくてつ～！」 俺はそつ言いながらみんなの方を指差した。俺の指の先には当然津出、灯糸、深澄そして内藤が呆然と椅子に座つて、俺達2人を見つめていた。

「空～とりあえず詳しく述べさせなさいよ～」

津出が不思議そうな顔で空に尋ねた。灯糸はなぜか顔を真つ赤にしながら硬直している。深澄はまだ状況を分かつていないうな顔で俺と空の顔を見比べている。そして、内藤は我関せずとあぐびをしていた。

「うむ、もう一度言う事になるが、私は燈也と付き合つ事になつた。ちなみに今のが私のファーストキスだ。みんなにも私達が付き合い始めた事を知つておいてほしかつた。以上だ。」

そんな空のことばに苦い顔をしながら津出が呟いた。

「そ、そうなの…まあいいんじゃない？」

「フフ…ありがとう。」

「ハイハイ、質問ー」

深澄が勢いよく手を上げた。

「はい、詩依君どうぞ。」

空が教師の様に右手を深澄に向けて出し、質問を促した。

それに答えるように深澄はなぜか立ち上がり空に聞き始めた。

「質問は3つあります。

1つ目はくどー君のどこがいいのか？ 2つ目はどちらから告白したのか？ 後、告白の場所。 3つ目は空先生は浮気は許しますか？ 私の質問は以上です。」

なぜか空もノリノリで答え始めた。

「よろしくまずは1つ目質問だが燈也のどこがいいのかか……うーむ、上手く言えないが顔とかではなく、燈也が持つ優しい心だな……」

空が自分でウンウンと頷きながら答えた。

「俺も一度くらい言わせてみたいなあ……」

内藤の小さく呟いた言葉は静かな病室で大きく響いた。。

「私の大好きな内藤くん、ちょっと後でいいかなあ？」

満面の笑みを浮かべた津出が内藤に話しかけた。

「ハツ、ハイツ！！お、俺はな、な、何も言つてませんぞつ……」

語尾がおかしくなっている内藤は顔がどんどん真っ青に変わり始めた。

（多分内藤は死んだな……）

「先生、次の質問よろしくお願いします。」

深澄が津出と内藤など気にしていないかのように質問の答えをさらりに促す。

「そうだな、では2つ目の質問だが告白したのはあれはどちらからなんだ？」

空が急にこっちを向いた。

「あの……もうこの話やめない？」

俺はこれ以上空に話すのを止めさせよつとする。しかし俺の願いは「だが断る。」と、さも当前のように却下された。

結局、津出、灯糸、深澄に散々冷やかされている俺をじり目に空は

2つ目の質問にもしつかりと答えた。

しかし、空は空の余命が半年ほどといつ事は言わなかつたし、俺の空への言葉の肝心な部分は曖昧に燈也の告白つて言葉で片付けていた。

「そして最後の質問だが、もちろん私は嫌だが、燈也がその人を選ぶならそれはそれでじょうがないと思つ。

詩依君これでいいかな？」

「はいつありがとうござります。浮氣おつけだつてよ、良かつたね？」

深澄が一いちらを向きウインクをしてきた。

「あああ！－深澄い誤解を招くような言い方すんな－－－－－！」

時既に遅し、俺の叫びは意味をなさなかつた。

「燈也…詩依の言葉はどういう意味なのかな？」

「だから何もしてないって－－！」

「詩依どうなんだ？」

「ああ－ねー」

深澄が一ヤ一ヤしながら答えた。

「一ヤ一ヤしながら言つなつ！－誤解を解け－－！」

「とーうーやー」

それから俺達はみんなでふざけ合つて、ここが病室だと忘れてしまうほど笑い合つた。

その時は今この場所は薬品臭い、無機質的な病室ではなく、学校の教室や友達の部屋のように温かい、優しい、大切な場所となつていた。

ちなみに騒ぎ過ぎたのか途中で看護士の人に怒られた。

面会終了時間が迫り、俺達は誰からともなく静かに立ち上がつた。

「空、また来るわねつー」

「ぜひ来てくれ。」

「お大事にいにいーー！」

「ああ、ありがとう。」

「そりー早く治さんだよーー！」

「早く治すわ。」

「じゃあまた来るな。」

「内藤はもう来なくていい。」

「ヒカル…」

「嘘だ。」

「また来なさい。」

「はーい。」

俺はドアノブに手をかけ、空に話しかけた。

「空…じゃあな…」

「燈也、いつもありがとう。そして今日はばいめん。」

「何が?」

「今日言えなかつた…」

「気に入らんな。まだまだ時間はある。空が言いたい時に言つてやれ。俺はそう言つと空の方へと近付き、頭をくしゃくしゃと撫でた。

「んつ。」

空は少し首を縮め、目をギュッと閉じ、俺のそれるがままにしていた。

「なあ、燈也。」

空が俺を見上げながら呟いた。

「ん?」

「ちょっと耳を貸せ。」

「ああ。」

空の口元に耳を近づけた瞬間、空の両手が俺の両頬を掴み、空と向

き合つようになった。

「えつ！？」

空と俺の唇が触れているのか触れていないのか分からなかつた。しかし、確かに空は俺に触れていた

「気持ちが抑えられなかつた。ありがとな、じゃあな。」

「お、おう。じゃあな。」

空の病室のドアを出た俺を待つていたのは一ヤ一ヤしている津出、灯糸、深澄、内藤、空のお母さん、そして2人の看護士さんだつた。

「え、つ！？ なんでつ！？」

「あ～もお～いちゃいちゃして～」

津出が溜め息まじりに呟いた。

「俺もしたい……」

「私もだあああ！！」

「私もー」

津出の言葉につられ、内藤、灯糸、深澄が俺をからかいだした。

「さあ～て、仕事、仕事。あつ、あんまり病院でいちゃつかないで下さいね～」

「あ～私も彼氏ほし～」

「今度合コンでもしよ～」

そう言つて看護士の人達は笑いながら仕事に戻つていつた。

「燈也君、あんな娘だけどこれからも末永くお願ひします。」

空のお母さんが空とそつくりな笑顔を浮かべながら、俺に言つてくれた。

空のお母さんにも今の事を見られていたかと思うと俺はとても恥ずかしくなり、顔を合わせる事も出来ず、必死にペコペコと何度も頭を下げて謝つた。

「いえいえ、自分こそ未熟者ですが、よろしくお願ひします。それに…」

「気にしなくていいのよ。それに燈也君なら安心できるしね。」

そんな事を言われていた俺は

「早く帰る~」とみんなに呼ばれた。

俺はおばさんに帰る旨を告げもつ一度頭を深く下げてからみんなと一緒に帰宅した。

この時の俺は何て馬鹿だったのだろう……

空が元気でいたのは俺に、友人に、家族に心配をかけないためなのに……

それなのに……

何が彼氏だ……

空は一人きりで暗い、冷え切つた病室で痛みに耐えていたのに……

【第十話～温かい一時～】（後書き）

まず、遅くなりましたが明けましておめでと「アレルコ」ます
本年も作者共々宜しくお願いします

そして、投稿が遅くなってしまい、読者の皆さんは色々とご迷惑をお掛けしました

ごめんなさい

これからはちゃんとペースを戻し、執筆作業をやりに頑張っていきたいと思います

今回はキャラクターが生き生きと描く事が目標だったので、それが伝わればとても嬉しいです

多分あまりないかも知れない友人達の絡みを出来る限り書きました

今更ですが、やつぱり文章の雰囲気が変わっちゃってますね…

まだまだ自分の中でも分確立しきれてないんでしちゃうね…

早く自分の文章が確立出来るようにしたいです…

今回お読みいただきありがとうございました

では、また次回にお会いしましょー

【第十ー話～触れる優しさ～】（前書き）

十一話を投稿します

良かつたら読んでいて下され

【第十一話／触れる優しく～】

みんなと一緒に見舞いに行つてからも俺は変わらず毎日、空の所へ行つていた。

みんなもほぼ毎日来てくれていた。それでもみんなも用事がある訳で全員ちゃんと揃う日はなかなかなかつた。

それに誰かが来ても俺らに気を使つてくれるのか、何かを買いに行つたりして病室にはいつの間にか2人きりになつている事もしそうだった。

今日は誰も都合が合わず、病室には俺と空の2人つきりだった。

「燈也…」

急に空が呟いた。

「ん？ なんだ？」

「今度の日曜日開いてるか？」

「ほぼ毎日暇だぞ。」

「フフ…そいつか。なら都合が良い。まあ、とりあえず約束だ、今度の日曜日朝一番に来い。

いいな？ 拒否権は認めない。」

「強制かよ…」

「毎日暇だと言つたのは君だが？」

「へいへい、次の日曜だな。」

空のいきなりの約束に戸惑いながらも俺は了承した。先程から意味もなく流れているテレビには俺達と2、3歳しか変わらない新人の女優が元気に笑顔を振り撒いていた。
(何で…何で空なんだ…)

そんな事を考えていた俺の口からは氣づかぬうちにため息が漏れていた。

「燈也…溜め息をつくのは駄目だぞ。溜め息をすると幸せが一つ逃げるんだ。」

空は微笑みを浮かべながら教えてくれた。

「そうなのか…これからは気をつけるよ。」

「分かったならよい…燈也、それよりキスをしないか?」

「キ、キグゲホッゲホッ」

空のいきなりの発言に俺は思いつきりむせてしまつた。空はそんな俺を不思議そうな顔で見つめていた。

「い、いきなり言つくなつ…！」

空のこんな突拍子もない発言には今までずっといたがまだ慣れない。多分一生慣れる事はないだろう。

「嫌だつたか?」

小首を傾げながら空は呟いた。

(嫌な訳あるか…つかその顔は反則だ…)

俺を見つめる空の瞳は少し潤んでいた。

当たり前だが嫌なはずがない。もし自分の好きな相手から

「キスをしよつ。」と言われて

「嫌だ。」と思う奴がいたら、俺がぶつ飛ばしてやる。

「べ、別に嫌な訳ねーよ。」

俺はそつぽを向きながら呟いた。

「良かつた…」

そつぽを向きながらも空の顔をこつそり見ると瞳が爛々と輝いていた。そして空は俺の視線に気が付いたのかその目をそつと閉じた。俺はぎこちない動きで空に近づき、空の唇に俺の唇を重ねた。俺にはこの時数秒が何時間にも感じた。

キスをし始めてからどのくらい経つたかは分からないがいきなり

「はいはあい、冷河ちゃん失礼しますよ~」と看護士が言いながらドアを開けてきたのだが、あまりに突然の事で俺は反応する事が出来なかつた。

俺達を見た看護士は

「なやー?」とゆつくり~「言いながらドアを閉めて戻つて行つて

しました。

俺はもう遅いがその時になつて慌てて脣を離した。

「燈也…温かかつたぞ…ありがと…」

「お、俺も…」

多分あの時看護士が入つて来なかつたら俺はずつとしていただろつ。

俺は何もかもを忘れてあの空間の中にいたかつた。

そつすれば空の病氣は進行しない…

変われるなら俺が変わりたい…

空が健康になるなら、俺はこの身を捨てたつていい…

俺は無力だな…

「…う…、…や、燈也…！」

「んわつ！？な、な、何だ！？」

俺が空が呼ぶ声で現実に戻つた時、空は互いの鼻先がくつつくほど俺の近くまで迫つていた。

そして、再び…

「大丈夫だ、燈也…私は君が拒否しない限りずっと君の隣にいる。だから、大丈夫だ。」

空がいつもの笑顔で呟く。俺の心は全て見透かされていくような話し方だつた。いや、実際見透かされていただろつ。

俺は何をやつてんだ…

一番辛いのは空なのに…

自分が辛いふりをしているだけじゃないか…

「「ごめん……」

謝る俺に空は再び微笑んでくれた。

それは他の人が見たら本当に小さな微笑かもしない。しかし、気持ちをあまり表情に出さない空にとつては満面の笑みなんだらう。

「気に入るな。君は…燈也は優しすぎるんだ。」

「ありがとう…空、ありがとう…あと、ごめん…」

「フツ、もういい氣にするな。次にこの事に關して君が謝罪をするならば、次は私の久しぶりの運動の相手になつてもらうからな。それよりそろそろ時間だな…今日もありがとう。」

俺は時計を確認し、立ち上がった。

「分かったよ。そうだな…じゃあな。」

俺は空に手を振り、病室を後にした。

俺がナースステーションの前を歩いていると、急にやつて來た看護士の人達に捕まつた。

「久遠くん、どう言つ事かなあー?」

「おねーさん達に聞かしてもらおうかな?」

「病院内でのキスはほどほどにしてもらいたいんだけどー?」

「あ…いや、すいません…」

「祐けちゃうなあー」

「おねーさんに彼氏いないからつて見せ付けないでほしいなー」

「本当にだめだからねー」

それから看護師の人達は俺を説教し終えると仕事に戻つていった。

「はあ…」俺はさつき空に言われたのに気づかぬうちにため息をしていた。

「幸せが逃げるか…」

先程空が教えてくれた言葉を思い出し、俺は一人ぼつと口に出してみた。

俺の幸せはもう逃げてしまったのか……

俺の幸せは空との未来だ。

（もし……）

一瞬最悪の事態が俺の脳裏に浮かんだ。

「いや……」

俺は頭を振り、そんな考えを捨てる。

「俺は何を考えてんだ……はあ……あつため息しちまった……」

やはり俺のため息をする癖は治りそうもないみたいだ。

【第十一話～触れる優しさ～】（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございます

読んでいただいたので分かると思いますが、今回の話は次話につづかりと続いています

次話では何が起こるんでしょーねw

日々、綺麗な文章が書く事が出来るよう頑張っているのですが…やっぱりまだまだですね…

次話でも燈也と空には思つてきつこひやこひやしてもひおひと黙つてます

これからも宜しくお願いします
でわでわ
失礼しまーす

【第十一話～吹き抜ける潮風～】（前書き）

遅くなりました

今回の話は自分自身も気に入ってる作品です
どうぞお楽しみ下さい

【第十一話】吹き抜ける潮風～

空との約束の日曜日

俺は前日に空に言っていた通りに空の病室に向かっていた。空が入院している階で、俺は今日も仲の良い看護士に絡まれた。

「あら～久遠く～ん。」

「こ～にちは。」

「今日はあんまり無理させりやだめだからね～じゃね～

「え？ あっ、はい…」

何が言いたいのか俺が理解する前に看護士はさつと行ってしまった。俺はとりあえず空の病室へと急いだ。

「ンシ ノンシ

「入るだ～」

俺はいつものようにドアを叩き、空の病室に入った。

そこには、無機質的な病院の服ではなく、私服を着ている空が笑顔で俺を待っていた。その横には、柔らかい微笑みを浮かべた空のお母さんもいた。

「え…？」

「フフツ 燈也、驚いたか？ 外出許可が出たんだぞ。」

「は、はい？」

「燈也君、急にこめんね。

外出許可が出てね、そしたら空が燈也君とビビりに行きたいって言つから、燈也君にお願いしようと思つたんだけど…

空から聞いてなかつた？

「い…や…全く聞いてないです…」

「空、ちゃんと言つときなさいって言つたじやない。」

「おばさんは空の方に目をやつた。」

「燈也の驚いた顔が見たくてな。」

「はあ……燈也君、本当に急だけど大丈夫?」

「いや……大丈夫ですけど……」

「俺が頭をポリポリとかきながら答えると、おばさんは
「じゃあ宜しくね。何かあつたら連絡ちょうどだいね。
楽しんできでね。」と言つて病室を出て行つてしまつた。

「フフ……驚いたか?」

俺の心でも読んだのか、空は短かくなつてしまつた前髪を赤いピン
で止めながら話しかけてきた。
(短い髪も似合つなあ……)

窓から薄い陽光が指している

微かな薬品の匂いが俺の鼻孔を刺激する

明け方の冷氣がまだ残つてゐる

空から漂つ空の柔らかい香り

空が立ち上がりカーテンを開けた

「さあ、どこが行こう。」

今日空とデートに行くなんて全く予想していなかつた俺は行き先な
ど決められる訳がなかつた。

「俺どこ行くかなんて決められないぞ?」

「大丈夫、私がしつかり調べておいたから完璧だ。」

「本当かよ……」

まずは自転車を出せと言つ空の指示に従い、俺は自転車置き場から
自転車を引っ張り出してきた。

「乗つていか?」

俺が自転車に跨ると空は遠慮がちに聞いてきた。

「お姫様どうぞ、お乗り下さい。」

「フフ…なり今日はそのお姫様のわがままをしつかり聞いてもらひからな。」

「あつやつぱりなし…」

俺のそんな言葉を無視して自転車の後ろに横向こむりくじと腰を下ろした。

「どう、まづまづこに行へんだ?」

「どこに行こひつ…」

2人の間に沈黙が流れた。

「空…やつぱ決めてなかつたのかよ…」

「燈也といられるなら、私はどこでもいいんだ。」

空は腕を俺の腰に回しながら顔をギュウッと俺の背中に押し付けて言つてきた。

（反則だ…怒るに怒れないじゃないか…）

「そうだ、燈也、海行こひ。」

「却。」

俺があまりにも早く答えたためか空はすべてこなは言葉を返してこなかつた。

まず病人を泳がせる事なんて出来ない。

それに近くの海まで自転車でどんだけかかるか分からない。

「何でだ~」

「頬を膨らますな、可愛いすぎる。」

「出発だ。」

「駄目だ。」

「砂浜に座つてゐるだけにするから良いだり?今年はまだ海見れてないんだ。」

空の切なそうな顔を見ると強く却下出来なくなつてきた。

「…本当に入らないか?」

「ああ。」

「仕方ねーな。ちゃんと捕まつてろよ。俺はゆっくりとペダルをこぎ始めた。」

「なあ……燈也……」

「ん？」

「このままどこか誰も知らないところにでも行かないか？」

「ばーか、何言つてんだ。ほら、これから坂だからしつかり掴んどけよ。」

「分かつた……」

後ろから聞こえる空の声は心ここにあらずと言つた様子だった。俺は腰に軽く回された手を両手でちゃんと回すようにして、坂を上がり始めた。

「ゼハア、ゼハア……よしつこつからは下り坂だ……」

「燈也……死にそうだが大丈夫か？」

「空が重すぎたみたいだ。」

「私に喧嘩を売るとはなかなか良い度胸だな。」

「グヘアツ……！」

俺の軽口に対し、空は俺の腰を回していた両手を思いつきり締め上げた。

空の体重が重いなんてある訳ない……

この間乗せた小柄な詩依より全然軽い……

きっと、健康な時に乗せてても軽く感じていただろうが……

けど……今は……

「まだなのか？」

後ろから高めな空の声が俺の耳をくすぐる。

「あ……後15分くらいで着く……はず……」

全身を汗だくにしながらも俺はペダルを漕ぎ続けていた。

「あつ見えてきたぞ。」「おお～」

角を曲がると、田の前に青く澄んだ海が広がってきた。浜から吹いてくる潮の香りを含んだ風がそつと俺達を包んでいった。

「フフ…潮の香りがするな。」「目の前だしな。」

俺はそう言つとペダルを漕ぐ力を少し強めた。
季節外れの海には海水浴客がいる訳もなく、当然客もいないのだから海の家も開いていない。

ちらほら見える人影は優雅とは程遠いサーファー達が波と格闘している姿だった。

「燈也、早くしろ～」

俺が自転車を停めるのに惑つてゐるのを尻目に砂浜をどんどん歩いて行つた。

「入るなよー」

「おー」

俺が目の前にあつた自動販売機で水を買って、温かいと言つより熱い砂浜へ腰を下ろした時、空は波が届くか届かない微妙な場所を歩き回つていた。

「お～い、燈也も来いよ～」「す、少し休憩させてくれ…」

「仕方ないな～」

そう空は笑顔でそう答えると、少し屈みながら手を伸ばして履いていたサンダルを脱ぎ、両手で持ちながら長めのスカートかワンピースかは分からぬがそれの裾を少しだけ持ち上げ、足首くらいまで海の中へ軽く入つて行つてしまつた。

「おい、入るなつて言つたじゃねーかよ。」「もう入つてしまつた。」

俺の言葉に対し空はにこやかに答えた。そこには反省の色など全く見えない。

「燈也、まだか~」

「はあ…今、行くよ。」

少し落ち着いた俺は靴をその場で脱ぎ、その中に靴下を突っ込んでジーンズの裾を数回折ってから空の方へと走って行った。

「うおっ！冷てっ！」

俺の足下の砂を波がさらりとゆく。

「待つてたぞ。」

そう言いながら空は俺の方へ向き直った。

「はは……」

潮風が空の髪とスカートを少しおびかせながら、空は舞い散る波の飛沫の中心に立っていた。

余りにも綺麗な光景に俺は心から見とれてしまった。

そこに立つ空の姿は今すぐにでも走つて近付き、思いつ切り抱き締めて、空の全てを俺の物にしたいほど綺麗だった。

空が水飛沫を俺に向けて飛ばしたのも気付かない程に俺は空の姿をぼんやりと追つていた。

「うわっ！おーー空っ！」

「えいっ」

空はもう一度波を蹴り、飛沫を舞い散らせよつとした。しかし、それは潮風によつて結局俺の方へ飛ぶことはなく空自身にかかつてしまつた。

「うわっ…」

空はフフ、と笑い始めた。そんな空を見て俺は膝に手を付くほど笑つてしまつていた。

「ばあーか。」

「馬鹿とはなんだ。」

「本当の事じやねーか。」

秋の海はやつぱり冷たかった。

けれどおかしな太陽のおかげか、空が近くにいてくれたおかげか俺

には冷たさは全くと言つていい程感じなかつた。

「そろそろ帰るか？」

「後少し……」

俺達は熱が残る砂浜に腰を下ろしていた。空はその頭を俺の肩に預けていた。沖から吹いてくる風は俺の髪をワックスの上からさらりとガチガチに固めていた。それなのに空の髪は吹く風に逆らわずにさうらうと揺れていた。

「燈也…好きだぞ…」

「いきなり何言つてんだよつ！」

空は俺の言葉を鼻で笑いスッと立ち上がつた。

「さあ、帰ろうか。」

空はスカートに付いた砂を手で払いながら、俺を見下ろしていた。

「ああ、そうだな。」

俺も立ち上がると、伸びを一回して、砂を払つてからゆっくつと歩き始めた。

「とうつ」

空はいきなり走ってきたかと俺の持つていた水のペットボトルを奪つた。そしておもむろにふたを開け、「ゴクッ」のどを鳴らしながら飲み干してしまつた。

「間接キスだな。」

「あ、あ、あほっ！ もう行くぞつ！」

俺は顔が赤くなるのを感じながらも自転車の置いてある場所に向かつて歩いていった。

「よし、出発すんぞ。いいな？」

「おう。あ、待て。」

「ん、どした？」

何かと振り向いた俺の唇に空はいきなり自分の唇を重ねた。

「バ、バカッ！！いきなり何すんだ！？」

「フフツ：燃料だ、燃料。」

「ハア…もう、行くぞっ」

「ため息は幸せが逃げると言つてるだろつ。」

「原因は空だろつ…！」

「つむさい。早く出発しろ。」

俺の言葉を空は微笑みながら一蹴した。

空といる事が出来る忘れられないこの一瞬

はつきりとした空の温もり

眩しい夕日

波の感覚

潮風が俺達2人を包み

そして

吹き抜けて行く

【第十一話～吹き抜ける潮風～】（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございました

前書きにも書きましたが今までの『C O O I S k y』の中でも気に入ってる話です

生き生きとした2人表現できたか分かりませんが、読んでいただきた皆さんに少しでも2人の雰囲気が伝われば良いなーと思います

これからも宜しくお願いします

【第十三話～幼き笑顔～】（前書き）

第十三話を投稿します

今作は新しいキャラが登場します

どうぞ読んで書いて下さい

【第十二話「幼き笑顔」】

「あはは～」

病室から幼い笑い声が聞こえたため、俺はノックしようとしていた手を止め、病室の名札を確認した。しかしそこにはしっかりと俺の幼なじみ、そして俺の彼女の名前である「冷河 空」という文字がしつかりと書かれていた。

俺は一呼吸置いてから、一度ドアをノックした。

病室からは空の柔らかい声が返ってきた。

「はい。」

「あ、俺だ。入るぞ。」

「おひ。」

俺が病室に入ると空と先程の声の持ち主であろう小さいお姉さんがいた。

その小さいお姉さんは小学校低学年、いやもう少し小さいだろう少女がちょこんとパイプ椅子の上に座つて、微笑んでいた。

「何をあほ面している。早く座れ。」

「あ、ああ……空、この子は？」

俺は広げてあつたパイプ椅子に腰を下ろしながら空に聞いた。

「この子はな」

空の言葉を引き継ぎ少女が自己紹介をしだした。

「僕は「岡川 鶴」オカガワ シゲミです。お兄さんは？」

その少女は髪を肩の少し上辺りで切りそろえられてた。その髪は少女が足をばたつかせる度に軽やかに揺れていた。

入つたと同時に気付いた事はその少女の服がこの病院の入院患者用の服だったという事だ。

「お兄さん？」

少女の無垢な瞳が俺に向けられていた事に俺は気付いた。

「ああ……ごめん……えと……俺は久遠燈也。」

空のか…まあ深い知り合いなんだ。

「んーと…お、岡川ちゃんは空といつ仲良くなつたの?」

俺は軽く自己紹介をした後、沈黙になるのはまづくなると思い軽く質問した。

「鶉、この馬鹿は私の彼氏だ。鶉よりガキな奴だが優しくしてあげてくれ。

「後、そんなに緊張しなくても大丈夫だぞ?」

空は緊張してこちららしい岡川と名乗った少女に優しく微笑みかけた。

少女は深呼吸をすると、ゆっくりと話し始めた。

「あ、あの、僕はね…こないだ検査の順番待つてる時、空ねえと色々お話ししてもらつたんです。

それでその後ジユースもらつて、それからまた少しお話しして仲良くなつたの。」

「と言つ事だ。で、時々勉強を教えてあげたりしてるんだよね? 鶉?」

「うん。空ねえには色々優しくしてもらつてるの。」

少女はピヨンと椅子から降りるとテクテクと空のベッドの端に腰を下ろした。

「よろしくね、岡川ちゃん。」

俺がそう言つと、岡川ちゃんは一度コクンと頷いた。

「うん。よろしくお願いします。」

それからには二人でたくさん話をした。

主に岡川ちゃんが俺達に話しかけ、それらを俺達が聞く。そしてたまに空が俺を馬鹿にする。それを見て岡川ちゃんが笑う。

俺達はそんな柔らかい、ほのぼのとした時間を過ごしていった。

そんな時、岡川ちゃんの声が少しずつ小さくなつていった。

「どうしたの?」

「鶉、どうした?」

俺達はあからさまに元気をなくしてきている岡川ちゃんを心配した。岡川ちゃんは俺達の言葉を受け、ゆっくり顔をあげると、話し始めた。

「あ、あの…僕の事鵜つて呼んで…だから…お兄さんの事…」
岡川ちゃんの声はさらに小さくなつていき、途中で言葉は途切れてしまつた。しかし、頬を真つ赤にしながらも一生懸命に喋る姿はとても可愛らしかつた。

俺と空は静かに岡川ちゃんの次の言葉を待つた。

あの……お尻さんの事……に、にいにいて呼んで……しゃですか？」

「もちろんんだよ、鶴ちゃん。」

俺がそう言つた瞬間に俯いていた岡川ちゃんが顔を上げ、少し照れている様子ながらも満面の笑みを返してくれた。

にいにあいかど、

〔四〕 〔五〕 〔六〕 〔七〕 〔八〕 〔九〕 〔十〕

鶴ちゃんを優しく見つめている空が話しかけた。

「うん！」

鶴ちゃんはそう答えると、今度は俺の方へ向かつてきて、俺の膝に
ちょこんと座つた。

それから後も先程とちつとも変わらない三人の家族のようにさえ思える温かい時間は少しづつ過ぎていった。

ふと時計を見ると、いつの間にか面会終了の時刻が近付いていた。

「あ… そろそろ時間が…」

俺は艶ちゃんを隣の椅子に座らせてから立ち上かると、ハイフ椅子を片付け始めた。

空は鶴ちゃんに優しい微笑みを浮かべながら「鶴、そろそろ時間だから自分の部屋に帰りなさい。」と言った。

「うん。にいにと部屋帰る。」

そう言って、椅子からパツと下りると、俺の後ろに回って、腰辺りに抱きついてきた。

微笑みながら俺と鶴ちゃんを見つめる空の顔はあたかも母親か姉のよくな慈愛に満ち溢れた物になっていた。

鶴ちゃんの椅子も片付けた俺は空のベッドに近付くと、空が口を開いた。

「一緒に行けなくて悪いな。」

「気にすんな。じゃあな、空。」

「ああ。」

俺は空の頭をクシャッと撫でた。空は目を細め、俺の手の動きに任せていた。

「じゃあ、帰るべ。」

「待て。」

そう言うと同時に空の手が俺の手首を掴む。

空は俺の顔をジーッと見つめるながら少し唇を尖らしていた。

俺は空の行動を理解し、鶴ちゃんがまだ俺の腰辺りに抱きついて、見ていないを確認すると、一瞬だけ唇を重ねてすぐに離れた。

「フフ…ありがとな…」

「俺に拒否権ないしな~よし、鶴ちゃん帰る。」

「うん。」

抱きついていた手を離すと、ドアの方へ歩き出した。

「じゃあ、空ねえまた来るね。」

「空、じゃあな。」

「鶴、燈也またな。」

空の病室を出て俺は鶴ちゃんに聞いた。

「鶴ちゃん、部屋はどこなの?」

「えつとね……もう1階下の6番のお部屋。」

「6号室なのかな?…まあいいや…行こつか?」

俺は鶴ちゃんに向かつてそつと手を差し出した。鶴ちゃんは俺の差し出した手をじっと見ていた。

「どうしたの？」

「んと…えと…」

俺の手を見ていた鶴ちゃんの田はこつの中にか遠慮がちに俺の田を見つめていた。

「そ…その…ここに…お、おんぶをしてほしいんで…す…」

俺は鶴ちゃんの頭を優しく撫でると、鶴ちゃんに背を向けてしゃがみ込んだ。

「はい、どうぞ。」

「ありがと、ここ。」

鶴ちゃんはさういと俺の腰の中に寄りかかり、両手を俺の首のところで組んだ。

俺は鶴ちゃんの太もも辺りを手で持ち、ゆっくりと立ち上がった。

（えつ…え…）

俺は鶴ちゃんが本当に俺の背中に全体重を預けているのだろうかと思つほど軽い事に驚いた。そして、その軽さは俺に鶴ちゃんがどれほど病魔に蝕まれているのか考えさせるには十分だった。

（この小さな体でどれだけ頑張つてんだよ…）

「ここ？」

鶴ちゃんが心配そうに尋ねてきた。

「あつ」めんね。じゃあ行くよ。」

「はい。」

鶴ちゃんは顔をギュッと押し付けていたので俺が歩く度に鶴ちゃんの短い髪の毛が俺の首筋をくすぐつてくる。

「鶴ちゃん、今日はお父さんとかお母さんは来なかつたの？」

「んと…僕のお父さんはいないの。」

お母さんは一生懸命お仕事してゐから来れないの…」

俺は言葉を無くしてしまつた。いくら向でも考えなしに聞こてはいけない事だった。

「でも…」

そんな俺の考えを遮るように鶴ちゃんは咳いた。

「でも？」

「今は…お母さんが来れなくとも僕は寂しくはないです。」

鶴ちゃんは一呼吸置くと、ゆっくりと口を開いた。

「僕に空ねえとにこにができたから…」

鶴ちゃんはそう呟くと今まで以上に強く顔を押し付けてきた。

「鶴ちゃん…ごめんね…」

そう言つた後、俺は続けた。

「鶴ちゃん、どんな時でもいいから何があつたら俺とか空にすぐ教えてね。鶴ちゃんのお母さんやお父さんの代わりはできなくとも、それでも、それでも鶴ちゃんのお兄さんやお姉さんではいてあげられるか…」

俺はゆっくり言葉を選びながら鶴けやんへと声をかけた。俺の背中では鶴ちゃんの嗚咽が洩れていた。

それは今まで幼い鶴ちゃんの中で溜まつっていた物が落ちていったようにも思えた。

「鶴ちゃん…もうかよつとゆつへり行くよ…」

「う…う…ん…」

俺はエレベーターを使わずに少し遠回りをして、階段で下りていった。

俺の首筋を冷たい物が流れ落ちていった。

俺が鶴ちゃんを病室の前に連れて行く頃には鶴ちゃんは泣き止んでいた。

「にいに、にいにでもう大丈夫です。」

「分かった。じゃあしゃがむまで待つててな。」

俺はその場でゆつたりとしゃがみ、鶴ちゃんを丁寧に降ろした。鶴ちゃんは俺の前に回ると笑顔で「にいに、ありがと。僕、にいに大好きだよ。」と言つて、鶴けやんは部屋に戻つて行つた。

「俺も帰るか…」

俺は伸びを一度し、深く息を吸つと、出口へと向かった。
俺の肺は慣れてきた薬品の臭いによつて満たされた。

【第十二話～幼き笑顔～】（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございました
空と同じ病院に入院している鶴ちゃんの登場です

幼くて天真爛漫な鶴ちゃんの言動にこれからも注目していくあげて
下さい。w

自分的にはとても動かしやすいキャラです。~~~~~
これからは多分結構登場していくと思うので空、燈也同様に暖かい
目で見ていただきたいと思っています。w

でわ、今回はこのくらいで…

次話以降も宜しくお願いします（・・・）

【第十四話～夢で会つた君～】（前書き）

今日はサイドストーリー的なお話を
ぜひ気軽に読んでみて下さい

今回は15回目の話とつづり事で後書きでは回例のパートナーを行つて
います

【第十四話～夢で会つた君～】

綺麗な満月が俺を照らしていた。
そこは見覚えのある土手だった。そして、俺の少し前に空の後ろ姿
が見えていた。

『空…』

俺の声に空は振り向いてくれなかつた。そして、空は俺の存在に気
付かないのか、どんどんと前に進み出した。

『空…』

俺はゆっくりと空を追い始めた。しかし、全く詰まらない距離を感
じ取つた俺はいつの間にか走り出していた。

『や、空！待てよ…』

必死に走つて、手を伸ばしても俺の手は空の温もりに触れる事は出
来なかつた。

追い付こうと更に必死になつた時、自分の足がもつれたのが分かつ
た。

俺は倒れながらも空へと手を伸ばしていた。

ドシッ

『空…』

俺の目の前には先程とは違つた闇が広がつていた。
すぐにそこが自分の部屋だということに気が付く。

『何だ…夢か…』

何て嫌な夢だ…まだ体全体がドクドクしている。ベッドから落ち
た時に背中を打つたのか少し息苦しい。
伸ばしていた俺の手はベッドのシーツ端を掴んでいた。

『あ…』

俺は一度舌打ちをすると、立ち上がり、ベッドに潜り込むと、再び

眠つの中へと落ちていった。

『燈也…燈也…』

『空…か?…』

後ろからの声に反応した俺が振り返るとそこには空が一糸纏わぬ姿で立っていた。

『お、おこ空つ…向てかつ…』…ングッ…』

俺の言いかけた言葉は空の唇によつて急に塞がれた。ゆつぐりと離れた空が頬をピンク色に染め、目線を俺から外しながら話し始めた。

『…と、燈也…君になら…こや、君に…その…わ、私の全て…全てを…あ、あげてもいい…』

『えつ…!…』

俺は目を見張つた。しかし、何がおかしい。俺は頭の中の霧を払うために田の前の空をじっと見つめた。

『燈也…い、嫌か?…』

空は、空はこんな風に顔を真つ赤に染めるだろつか。空はこんなにも恥ずかしがるだろつか。

きっと

空はこんな時でも…

俺がそう感じた瞬間、俺の目には前に再び天井が映し出された。

『やつぱり夢…か?』

ボーッとしていた意識がやつと戻ってきた。今、俺は俺の部屋にて、ベッドで横になつている。そして、空は病院のベッドにいるはずだ。

『今日は変な夢多…な…』

上半身を起した俺は自分の下半身の膨らみに気がついた。

『あ…、やべえ…』

俺の頭の中に先程まで夢の中で見ていた空が鮮明に浮かんできた。俺は頭を数回振り、記憶からぬぐい去ろうとしたが、そんなに簡単に消えるような事でもなかつた。

「明日どんな顔すりやいいんだよ……」

横になりながら、天井を見上げる。目を閉じても浮かんでくるのは空の姿だった。

「寝れね~」

カーテンの向こうの空は少しづつ明るくなり始めていた。

俺の今日といつ一 日はこうして色々な意味で元気で、しかし昨日の疲れがなくならないまま始まつた。

【第十四話～夢で会つた君～】（後書き）

（- A、）「今回も

川。」「お読みいただき」

（- A、）「ありがとうございます」川。

（- A、）「今回は前の話で登場した岡川鶴ちゃん」とツーちゃんが来てくれています

川。」「ツー」

ツー「は～い、姫ちゃんこんにちは～～岡川鶴」とツーです～～」

（- A、）「ツーちゃんがいると場の空気が良くなるよね」

ツー「ほんとっ！？」に、ありがと～～」

（* - A、）「ふひひ」

川。」「ほほほ、ドクオはロココンか」

（- A、）「ちやうわ！」

川。」「私なんかよりツーちゃんの方が好みなんだな

覚えておいで」

（- A、）「何でそつなるんだよ！」

ツー「にこにこが困つてゐー

あははー

川。」「あはは」

（- A、）「クー、顔が笑つてしませんよ？」

川。」「それよりドクオは何で夢を見ているんだ

ツー「にこにの夢に裸のお姉ちゃんが出たんでしょー？」

にいにえつちー

川。」「Hツチー

（- A、）「ちょっと待て～～あれば作者のせいだ…」

作者「はーい、今日の座談会はこの辺りで終了です」

（# - A、）「作者…てめえ…」

ツー「次話からも僕もいっぱい出るから姫ちゃん宜しくお願ひします

！」

川。・。)「今回もお読みいただきありがとうございます
では、次話でまた会いましょう」

(・ A、・)「あつー俺の言葉ー！」

川。・。)「せーの

一同「ばいばい」

【第十五話】未来への願い～】（前書き）

第十五話を投稿します

宜しければ読んで書いて下され

【第十五話】未来への願い～

あの変な夢を見てから数日後、今日も俺は空の病室に来ていた。別に俺が何をした訳では無いが、あの日は罪悪感を感じていた。

「うーつす、入るぞ～

「どうぞ。」

俺の声への返事は今日は珍しく空一人の声だった。

「あれ？ 今日鶉ちゃんいないのか？」

「今日は検査と言っていた。

そうだ、燈也、鶉ちゃんの病室で待つてやれ。

「ああ。。じゃあ鶉ちゃんの迎えに行つてくるな。」

「燈也。」

「ん？」

俺は踏み出しけかけた足を止めた。

「今日はよそよそしくないな。」

「へ？」

「ここ数日、燈也の様子がよそよそしかったから何かしたか不安だつたんだ。」

俺は空から目を逸らす事が出来なかつた。俺は自分自身気が付かぬうちに空を不安にさせていた事にやつと今気が付いた。

「う..めん。

別に空は何もしてないよ。ただちょっと…」

「ん？」

「いや… その夢を見て、な…」

「夢？」

何か嫌な夢だつたのか？

俺の頭に夢での空の姿がまた浮かんできた。

「いや、ちょっと… その、へ、変な夢で… そ…」

もう空を直視する事が出来なくなつた俺は頭をかきながら、明後日

の方向を見た。そして、そんな俺をじっと見つめていた空は何か感じ取つたのかフツと笑つた。

「夢の私は気持ち良かつたか？」

「ゲフツッゲフツッ！－！」

空のストレートな表現に俺は思いつ切り咳込んだ。

「ばつ馬鹿！－お前は何を言つてんだ！－！」

俺のそんな様子を見て空はキョトンとしていた。

「何だ違うのか？」

「ちつ違つうわ！－！」

「なら今からやるか？」

そう言つと空は俺を迎えるよつて両手を広げた。

「も、もつお迎えに行つてくるわ！－！」

俺はそう言つて、「意氣地なし～」と眩いでいる空を無視して部屋を出ようとした。しかし、俺は足を止めた。

「なあ、空。」

俺は振り返ると空の一歩近付いた。

「どうした？」

「その…心配をさせて悪かった。ごめん。」

「私は大丈夫だ。」

そう言つと空は二つリと笑つてくれた。

「ありがと…」

そつ言つて俺は空を軽く撫でると、鶴ちゃんの元へと向かつた。

「ひこにむけ。」

「あら、燈也君今日はお迎え？」

鶴ちゃんが俺や空の事を話しあつていていたため、小児科のほととぎの人は俺達の事を知つていた。

「まだ鶴ちゃんは検査のはずよ。」

「やうですか…じゃあ待つてますよ。」

トントンッ

いないと分かつていても、俺は一応ノックをした。

俺は

「失礼しまーす。」と言しながら、静かにドアを開けた。パイプ椅子を引つ張り出して腰を下ろした。俺は静かな病室でのんびりと待っていた。

何分たつたどろうか、病室のドアが開く音で俺は少し落ちかけていたまぶたを戻した。

「あつ、にいに！」

鶴ちゃんは俺だという事に気付くと、パタパタとスリッパを鳴らしながら、やつて來た。

「にいに、ただいま。」

「ん、おかえり。」

俺は近寄ってきた鶴ちゃんの頭を優しく撫でた。

「じゃあ、お兄さん後はよろしくね。」

鶴ちゃんを連れてきた看護士さんはそのまま、病室から出て行つた。

「鶴ちゃん少し休む？」

「空ねえの所に行きたい。」

「よしひ、じやあ行こうか。」

俺はそう言つて立ち上がり、パイプ椅子を元あつた場所に片付けて、

鶴ちゃんの小さな手を握つた。

「ほらほら、このお兄さんが僕のにいなんだよ。」

「どうも～」

鶴ちゃんは知り合いで会つ度に俺をその人に紹介する。俺の記憶ではもう俺を紹介した人にでさえ鶴ちゃんは再び紹介していた。

「優しいお兄ちゃんが出来て良かつたねー。」

「自慢のこいにです。」

鶴ちゃんは俺の顔を見上げた後、じつちが恥ずかしくなるくらい胸

を張つて血漬をした。

鶴ちゃんの話を俺が聞いているとすぐ「空の病室に到着した。
トントンッ

鶴ちゃんの小さな手がドアを叩く。

「空ねえ~」

鶴ちゃんはそつまつと、空の返事を待たずに病室へと入つていった。

「空ねえ聞いて、聞いて。」

「鶴、どうした?」

俺は空と鶴ちゃんの会話を聞きながらドアを後ろ手に閉めた。

「今日、ここにがお迎え来ててくれたんだよ。」

「そうか、それは良かつたな。」

パイプ椅子を一つ取り出し、両方とも組み立てる。俺は一つに腰を下ろして、一人の会話に耳を傾けながら、少し口を開じた。

「でねでね~」

鶴ちゃんのまだ幼さの残る可愛い声が耳に響く。

「燈也が何かやつたのか?」

空の温かい優しさのこもった声が俺を満たす。

「あ…にいに寝てる…」

「ふむ…疲れているのだろう…鶴…少しだけ静かにお話しそうか。」

「うん…」

俺は眠り行く意識の中で願つていた。

今この空間が病室ではなく、家で笑い命える未来が来る事を。

【第十五話】未来への願い～（後書き）

今回もお読みいただきありがとうございます

今回の話は当初、前回の話と関係はなかつたのですが、考えていくうちにやはり前回と関係付けてみました

前回の物語に特に深い訳はなく、思春期の燈也を書いてみました

ぜひ前話と共にお楽しみトロ～

これからも燈也、空、その他キャラクターそして作者含むてこの物語を宜しくお願ひします

【第十六話～秘密の予定～】（前書き）

十六話を登校します

今日は久々に学校でのお話です
良ければ読んでいって下さい

【第十六話／秘密の予定】

「燈也」「

聞き慣れた声が俺を呼び止めた。後ろを振り向くと、そこには内藤がいた。

「なんだ…陽一かよ…」

「なんだつて…燈也、対応ひでえー」

「んで、用事は何?」

「あつ、そうそう。涼華が食堂で呼んでたよ。」

「分かつた、行こうぜ。あ、途中で購買寄るからなー

「あいよー」

「で、津出は何の用なんだ?」

「知る訳ないじゃん!!」

内藤はわざわざその場で立ち止まると、胸を張つて答えた。

「えばつて言うんじゃねえ!」「

俺はそう言いながら、内藤の胸を軽く小突いた。

「いつて一殴るな、燈也ー」

やられた内藤は俺の背中を平手で叩いた。

「てめえー

「燈也からやつてきたんじゃーん。」

俺達はこんな風にふざけていた上、途中の購買で昼食のパンを買つていたので、食堂に着くまでに結構時間がかかってしまった。そして、その食堂には大変ご立腹の津出が座つて待っていた。

近づいて分かつたが津出の隣の席には灯糸と深澄も座つて待つていた。

「わりい。

「涼華、ごめん。遅れた。」

「あんた達遅いっ！」

まあ、いいわ。ちょっと話があるのよ。良いわよね？」「津出は田の前のオムライスをつつきながら言つてきた。

「おう。」「

「いただきます。」「

俺の隣に座つた内藤は早速パンの袋を開けて食べ始めた。灯糸と深澄も話を止め、津出の話に耳を傾けていた。

「まだまだ先の話になるんだけどね、出来たら空の病室でクリスマスにパー・ティーをやらない？

空の病状で無理ならしじうがないけど、みんなでいた方が空も楽しんでくれるだろうし。

あ、内藤、残り食べて。」

津出はそう言つと、内藤の方へ半分以上も残つたオムライスを差し出した。その瞬間、内藤は空腹の肉食獣に肉を与えたかのような早さでオムライスを食べ始めた。

（いつの間にパン食つ終えてんだよ…）

「かなり先だな… 急にどうした？」「

俺はそう言つと、袋を開けてパンを一口かじつた。

「いや早めに言つとかないと予定入つちゃうかもしれないでしょ？ つて言つた入れられたらこっちも言いにくくなるしね。

… 美咲と詩依はいい？」「

「もちろんだああ…！」

「当たり前じやんつ、りょーかつ」

それまで静かに話を聞いていた灯糸と深澄は笑顔で答えた。

俺はその時、ふと鶴ちゃんの笑顔が頭に浮かんだ。

「なあ… 津出…」

「何？」「

「空と俺の知り合いの子で鶴ちゃんつて子も一緒にいいか？」「もちろんOKに決まってるじゃない。」

その答を聞いてから俺は鶴ちゃんの事をみんなに軽く話した。

俺が話し終えて少ししてから、昼休み終了を告げるチャイムが鳴つ

た。

津出は立ち上がると俺達にビックと人差し指を向けて
「つて事で空と鶴ちゃんのプレゼントは用意しどきなさこよー特に
その馬鹿男子2人組！分かった？」と言った。

「あいよ～」

「陽一と一緒にすんな！」

「あんたちは似たり寄つたりよ。」

津出はハアとため息をついてから歩き始めた。

「ばあ～か、ばあ～か。クスクス

「ばあああかあああ」

深澄と灯糸もそう言つてスタスタ歩き出した。

「燈也…結局、お前も馬鹿なんだよ…」

陽一もそう言つて俺の肩をポンと叩いて歩いて行つた。

「てめえら……待てやー！」

誰一人として俺の言葉を聞こじしない四人を俺は追いかけた。

内藤に追い付いた時、とりあえず頭を一度こづいといた。

すぐに津出達の溜め息が聞こえた。

「そりだ…津出、クリスマスの事空と鶴ちゃんには俺から言つてお
いて良いんだよな？」

「あつそりそり忘れてたわ。その事は内緒にしてときなさこよー！」

「え？あ、うん。分かった。」

「ドジキリの方が喜んでくれるはずだしねつー」

「あいよ～」

少ししてから五時間目の授業が始まった。

教師が黒板に書く言葉をノートに綴りながら俺は別の事を考えてい
た。

（何あげようか…）

俺の頭では色々な品々が浮かんでは消えていった。

空が一番喜ぶプレゼント
空が笑顔になるプレゼント
空が幸せを感じるプレゼント
俺は空に向かうプレゼントしようつ……

【第十六話～秘密の予定～】（後書き）

今回もお読みいただきありがとうございます

今回は全く空が登場してきませんが、この二つ話もたまになら自分の
にもありかなと思いました

たくさん的人物を動かすのは難しいですがもつともつと積極的に登
場させていきたいですね。まあこれ以上登場させる予定は、今の
ところ”はありませんが、”

これからも宜しくお願いします

【第十七話～君を待つ時間～】（前書き）

遅くなりましたが、17話を投稿します

よろしければ読んで書いて下さい

【第十七話～君を待つ時間～】

帰りのHRが終わり、早く空の所へ行こうと俺は鞄を持って席を立つた。

「あつ久遠、ちょっと待つて！」

廊下に出ようとした所を津出が引き止めた。

「ん？ 何？」

「今日、内藤と空のお見舞い行こうかと思つてゐるよ。久遠も行くなら一緒に行かない？」

「分かつた。あれ、でも内藤は？」

一緒に行くと言いつつ、姿の見えない内藤に俺は首を傾げた。

「あそー。」

津出が指差した先には篋で「」を集めている内藤の姿があった。

「今日、掃除の班か。」

「そーゆー事。」

ベランダにいましょ、と言つ津出の提案に従い、俺達はベランダから一人で内藤をボーと眺めていた。

「ねえ、久遠…」

俺が見つめる先では陸上部が練習を始めようとしていた。

「ん？」

津出は言おうか言わまいか少し悩んだ様子で一呼吸置いた後、おずおずと聞いてきた。

「空は本当に大丈夫なの？…」

俺は陸上部を眺めるのをやめて、ゆっくりと首を上げて空を見た。今日は所々に雲があり、太陽を隠しているのにも関わらず、とても明るい空だった。

「…空は俺と約束した。

だから大丈夫だ、大丈夫…」

俺はその言葉が津出へ向けているのか、それとも自分自身へ向けて

いるのが自分でも分からなかつた。

「なら大丈夫よね！」

「ああ……」

俺はゆっくりと視線を再び陸上部へと戻した。陸上部はスタートの合図で走り出した瞬間だつた。俺はその姿をずっと田で追つていた。

「空は絶対嘘はつかないよね。」

津出の方を俺は向いて一言呟いた。

「あんましみつたれた事言つてんじゃねーぞ。」

津出は俺の言葉に驚いた様子だつたが、すぐにいつもの様子に戻つた。

「ぐ、久遠に言われなくとも分かつてゐわよー。」

「なら良かつた。」

俺がそう言つた時、急に教室から大きな音がした。慌てて見てみると、机をいくつかひつくり返した内藤が苦笑いをしながら頭をかいでいる姿が映つた。

「はあ……あのばか……」

隣から大きな溜め息が聞こえた。

俺の口からは自然と笑みがこぼれていた。

空、早くこつちに来いよ。みんな待つてゐるからな。ちゃんと待つてゐるからな。

【第十七話～君を待つ時間～】（後書き）

今回もお読みいただきありがとうございました

今回の話はちょっと短くなってしましました
でも、次話を極力早く投稿出来るようにするので楽しみに待っていて下さい

今回はありません、学校内でのやり取りです
いつもと違う雰囲気を出せたらな良いなと思っています

でわ、これからも宜しくお願ひします

【第十八話／木漏れ日の温もり～】（前書き）

皆さん、 じんにちは

十八話を投稿します

十七話の後編としてお読み下さい

【第十八話】木漏れ日の温もり～

「悪い、待たせた。」

内藤が掃除をやつと終えてきた。

「遅いわよ、このばかっ！」

「ばーか。」

「ば、馬鹿つて言う奴が…」

内藤の言葉が途中で止まつた。隣にチラリと田をやるとそこには冷めた微笑みがあった。

「内藤くん、馬鹿つて言った奴が何だつて？」

「ぬわ、ぬ、ぬわあんでもないですよ。

そ、それより早くお見舞い行かない？」

内藤にしては上手い話の切り返しで、俺達は当初の目的通り病院に向かう事にした。

俺は内藤と共に自転車で走つていた。津出は内藤の後ろにちょこんと座つている。今まで静かだつた津出が不意に声を出した。

「あつ、内藤、止まつて。」

「ぐおふつ！…」

隣で変な声が聞こえた。何が起きたのかと、内藤の方に田をやると津出が内藤の腰をギュッと抱き締めていた。

内藤は急ブレーキをかけて止まつたが、俺は敢えて止まつうとはしなかつた。

2人を無視して走り去ろうとした俺を後ろから声が呼び止めた。

「ちょ！…燈也行くな！…」

「ちつ」

俺がスツとターンして内藤の方を見ると、ゾンビのよに俺の方へ手を伸ばしていた。内藤の横に戻つて気付いたが、自転車の後ろに津出の姿はなかつた。

「さつき舌打ちしただろ！」

「あれ、津出は？」

「舌打ちしたよなー！」

「津出は？」

「うつ……あそ」……」

少し半泣きになっている内藤が指差した先では小さな花屋に津出が入つて行つた。

「ふわあ……燈也はいーの？」

内藤が欠伸をしながら尋ねてきた。

「ああ……」

俺の頭の中に空が入院してすぐの事が思い浮かんだ。

その時、俺は買つてきた花束を花瓶に入れていた。

「なあ、燈也。」

「ん？」

「もうわざわざ来る度に何かしら買つてこなくとも良こぜ。」

「え？」

「こんだけしょひつひつ来るのにその度に何か買つてきたらすぐこ

金無くなるだろ？」

「いや、大丈夫だぞ。」

「馬鹿、意地を張るな。」

「でもなあ……」

空はそれから少し悩むとこ言つた。

「なら、花瓶の花が枯れたりしたらにしてくれ。あまり払わせたくないのだ。」

俺はその言葉に渋々納得した。しかし、実際はおばさんによつてちよくちよく花束は変えられていて、なかなか俺が新しい花を持つて行く機会はなかつた。

「あつやつと出でてきた。」

内藤が店から出てきた津出を見つけた。津出の手には綺麗に纏められた花束が握られていた。

「あ、内藤この花束あなた持ちね。」

「えつ、ま、まじですか！？」

「冗談に決まってるじゃないつ！」

「だいたいそれじゃあなたの花束になつちやうでしょつ！」

「ほれ、バカツブル行くぞ。」

俺はそう言つとペダルを踏みしめた。後ろからは津出が何かしら叫んでいるのが聞こえた。

少し長めの坂を一気に駆け上ると、真っ白い清潔感漂う建物がすぐ見えた。冬が近づき、寒くなつたとは言え、敷地内の芝生では散歩をしている人などがまだまだいた。

その光景は一瞬本当にこの建物が病院なのか俺を困惑させた。

「燈也どじつした？」

「何でもねーよ。」

一瞬呆けてしまつた俺はすぐに内藤の後を追つて、駐輪場へと向かつた。

俺達はそのまま外来患者用の出入口ではなく、入院患者のお見舞い用の出入口から中に入った。さつさとエレベーターホールに向かい、乗り込む。もう見慣れたエレベーターで上へと向かう。途中の階で誰も乗り込んで来る事はなく、すぐに到着した。

病室に入る前に、手を良く洗つて、アルコールで除菌する。そして目の前のドアをノックした。

「はい。」

「あつ！」

聞き慣れた2つの声が部屋から聞こえてきた。俺がドアを開けた瞬間に鶉ちゃんが俺へと飛び込んできた。

「にいに、こんにちは。」

「おつ鶉ちゃん、こんにちは。」

俺が鶉ちゃんに抱きつかれたまま体をどかして、津出と内藤が入つてこれるようにする。

「空、お見舞い来たわよつ！」

「冷河、やつ狂一」

「お、津出に内藤じやないか。元氣だつたか?」

「入院している人が詫う言葉じやないでしょつ！」

「フフ… そうだな。」

津出と話をしている空はやはり嬉しそうだった。

「そうそう、これお見舞いの。」

「そんな気を使わなくていいのに。」

「いいんだって。」

「津出、ありがとうございます。」

「気にしないのつ！」

「なあ 令河

2人の会話を観察

2人の会話を聞きながら、全員のパイプ椅子を持ってきていた内藤
が空へ話しかけた。こういうさりげない気配りができる所は内藤の
良いところだと思う。

「一応、それ俺からもね……」

「 そ う だ つ た が、 内 藤 も あ り か と う 」

俺に抱きついてキヤツキヤツしてゐる鶴ちゃんの頭をクシヤツと撫で、ゆづくりとパイプ椅子に腰を下ろした。

「鶴、挨拶をしなさい。」

俺はその空の言葉を聞いて、苦笑してしまった。俺を見ていた空が

不思議、どうな顔でどうった?、と尋ねて見た。

「二年、空が鶴丸さんの両親がたへだなー、よ。」

「え!? 一の子母^{トコモ}と蟹^{カニ}の子共^{コトコ}!? 」

内藤アーティストの煙草の儀

「うるさい事うらしくないよ」

「そんな事ある訳ないでしょ！」

津出かハシツと内藤を呑いた。

いつの間にか鶴ちゃんは俺の腰にギュッと抱きつこうとした。

「鶴、今度こそ挨拶しようか。」

「は、はい。」

そう言って、鶴ちゃんはまだ緊張した様子で自己紹介をし、その後にペコリと頭を下した。

「まだ緊張してるな。」

鶴ちゃんは俺から離れてテクテクと空の所へと進んだ。空はひょいと持ち上げ、ベッドの上に座らせた。

「大丈夫、2人共優しいお姉さんとお兄さんだからな。」

「鶴ちゃん、あのお兄さんは好きに使っていいのよ。」

津出が笑顔で鶴ちゃんの近くのパイプ椅子に腰を下ろした。

「おいで。」

津出が鶴ちゃんへと手を伸ばす。その行動を見て、鶴ちゃんが空を確認する。空はゆっくりと笑顔で頷いた。すると鶴ちゃんは空から離れると、嬉しそうにぴょんと津出の膝の上に座った。

「何か妹ができたみたいね。」

津出が鶴ちゃんの頭を撫でながら言った。

「妹…響きがいいな…」

今まで無言だった内藤がぼそりと呟いた。

「鶴…」

「鶴ちゃん…」

ほぼ同時に声を出した空と俺を不思議そうにキラロキラロと見比べた。

「はい？」

「あいつには気をつけなさよ。」

最後に津出は鶴ちゃんへと注意を促した。鶴ちゃんは津出の顔を確認した後、内藤へと一度目をやつしてから満面の笑みで答えた。

「はい。気をつけます。」

「ちよつ…ひでえ…！」

誰かが急に吹き出した。それが引き金になつて全員が笑い出した。

唯一鶴ちゃんだけがなぜ俺達が笑つていいのか分からぬつで、キヨトンとしていた。

「…涼華ねえ。」

「何？鶴ちゃん？」

「ただ呼んだだけです。」

エヘッと鶴ちゃんは笑いながら言つた。

「ん～かわあい～な～もうつ！」

津出は鶴ちゃんの顔に頬ずりをしだした。俺と空、内藤はその様子を話しながら眺めていた。

「涼華ねえ、こしょばゆいです。」

「だつて鶴ちゃんが可愛いんだもんつー。」

（津出、それは理由になつてないぢ…）

意味の分からぬ理由を言つた後に津出は今度は鶴ちゃんをギュウと抱き締めていた。

「涼華ねえ…あつたかいですか…」

「なあ、空…」

俺は横目で津出と鶴ちゃんを見ながら、空のベッドに近づいた。

「どつした？」

空はそう言しながら、ベッドの上を少し動いて俺が腰を下ろせるようにしてくれた。俺はそのままの勢いでくれたスペースにゅっくつと腰を下ろした。

「ん～何となくな…」

「ありがとう。」

ベッドに置いた俺の右手の上に空は左手をそつと重ねてきた。

俺は左手で空の左手を持ち上げると、右手を上向きにして、空の手をゆっくつと重ねた。そして、壊さないようつたてつと握った。

「フフ…」

空の柔らかい声が俺の耳をくすぐる。

ゆっくつと部屋を見渡すと、津出はまだ鶴ちゃんを膝の上に置いた

まま仲良く話していく、内藤はその様子を優しい笑顔で眺めていた。

俺はそのまま目を閉じた。俺の肩に微かな重みが乗つかった。
肩に温もりを感じた。手にも温もりを感じた。
空の温もりは俺から離れなかつた。

【第十八話「木漏れ日の温もり」】（後書き）

今回もお読みいただきありがとうございました

皆さん今年の夏はどうですか？

自分は夏休みの真っ最中ですが、平日より忙しく日々が続き、まと
まつた時間が確保出来ないです…

はい、またいつも言い訳です 〃

…いや、実際忙しいんですよ？（本当ですよ？ 〃

こんな更新ペースでこの物語の読者が毎日の人が絶対無いつ
てのは本当に嬉しい事ですし、やる気にも繋がります

毎度毎度の事ですが、本当に皆さんありがとうございます
次話も登場人物含めこんな作者を宜しくお願ひします

でわ、次話でまた会いましょー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5775c/>

Cool Sky

2010年12月4日15時00分発行